
とある魔術の死神戦記

ノクト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術の死神戦記

【Nコード】

N9041V

【作者名】

ノクト

【あらすじ】

少年は、よくあるテンプレでとある魔術の禁書目録の世界にチートを引っ提げて転生することになった。だが、彼が転生した名字が、『上条』。そして、彼の右手には……《幻想殺し》が、宿っていた。

ブローグ

「私のミスで、貴方は死にました。」

..... なんかハガレンの真理の扉的
場所で、深海魚が沖合いに出てきてビバークするような一声を
発し
やっがった。

..... 発言のせいで痛々しい美少女が。

「とりあえず、アンタ誰？」

「神ですッ!!」

帰るか。

「帰らないでください!」(ノムム)

思考を呼んだ。流石神(笑)

「笑いを付けないでくださー」割愛

つーか俺が死んだって、ンなわきゃねエだ
...ダンプカーに跳ねられ、トマトみたいになつた覚えがある
.....。

「つまり、俺が五臓六腑を人肉ジュースになったのはオマエのせいか。」

「そこまでグロテスクじゃないです!!」

あんま変わんねエだろ。

「でよ、だったらまずオマエにはやらんとイカン事があんだろ」

「え?えーと……………?」

「先ずは謝りやがれッ!!!」

「はっあっ!?!」

叫びながらの頭突きを喰らわす。

頭抱えて悶絶してるが、自業自得だ。

んで、どうされたい?

「うつ…………もう喋ってくれないんですね。ハッキリ言って、別世界に転生して貰います」

ほう、何処に？

「とある魔術の禁書目録です」

……まあ、好きなんだが、あそこって立ち位置によって死亡率が跳ね上がるからなア。

体の基本スペックは？

「一応バグにしていますが？」

不死じゃねエンだな。

「だから能力をあげちゃいます。何がいいですか？」

テンプレだなア……。さて、これによって今後が大きく変わるからな。

「人智を超えた演算能力と頭脳。黒崎一護の無月習得状態の全能力。あ、無月撃ちたい放題にして。つかしろ。あとは、天鎖斬月に完全催眠の能力を付与。山本元柳斎及び藍染を含む隊長各と十刃の経験、技術と、霊圧に比例した破面の基本能力。それと完全記憶能力。『事象の拒絶』、『覇気』を。」

「神に成りたいんですか！？私より強いですよ！！」

あれ？出来ねエの？人の事ブチ殺したクセにイ？

「はうう、出来ますう」

はっはッは、言ってみるモンだな。

「はあ、解りました。容姿はどんなのがいいですか？」

は？そんなとこまで？

まあ、いいか。

「取り敢えず、俺はそれなりにイケメン男子で」

個々で男って言わねエとな、まあ『間違つて女にしちゃった』なんて言い出したりしたら――――もオ、自分を抑えらんねえ。思わずブチ殺しちまいそオだア。

ブルッ！！「！？わ、わかりましたあ。では行ってらっしゃあいでふ。」

転生後

あー、一応転生には成功した響夜です、はい。

乳児の黒歴史はスルーして。

一応、とある世界に来れたのは確認出来た。

だって、学園都市の事テレビに出てたんだよ。

まあそんな事は些事なんだよ。問題は俺名字。

父、上条刀夜。母、上条詩菜。俺、上条響夜。

何で一番死亡フラグの多いポジにしゃがったあの駄目神!!??

まあ、斬月も影から出せ。山本総隊長達の経験と技術は色々試して確認出来た。

霊圧は皆感知出来ないから、幼稚園のかくれんぼでは無敗の記録を叩き出した。(霊圧関係無くな?)。

最高の両親だね。

鍛練も欠かしてない。ここで鍛えなきゃ来るべき厄介事は乗り越えられねえ。当たり前だろう?

鍛練つても結界張って、具象化した天鎖斬月とひたすら剣戟。一度だけ『無月』を使ったが、霊圧は消失しなかった。

余談だが、そのせいで地形がヤヴァイ事になり、8時のニュースに出てた。

流石に結界も《無月》には、耐えきれなかったわ。

後は色々問題の『幻想殺し』。

アレイスターはこれをストッパーだと言っていたが……不幸なのは判ったッ！！

だって一年間で交通事故約100回だぞ！！

ただの人間じゃあ死ねるわ！！！！

まあ、車全部殴り飛ばしてるけど。トラックだろうが何だろうが、基本三次元の事象じゃあ傷ひとつ付ける事は出来ねえのよ。

おかげで慰謝料とかで金がアホみたいに増えた。

素手で不良集団や、偶々麻薬取引してたヤクザ相手に無双して、組織丸ごと壊滅させたことも有ったな。

斬魄刀……ブチ殺しても大丈夫なウンコクズか天使位にしか要らねエ……。

どうやら幻想殺しは鬼道、斬魄刀、霊子製造物……霊子を元素とした物には作用してないみたいだ。

14巻で土御門が、幻想殺しは本来異能である生命に作用していない的な事言ってたし。

じゃねエと幽霊が右手が触れるだけで消える筈。だが実際は消えなかったし（既に動物の魂で実験済み）。

そして、卍解時の天鎖斬月（常融合形態）は幻想殺しの能力も付与されてた。ま、右腕と融合してるしな。

嬉しい誤算だ。

ああ、後些事だが俺の容姿が上条当麻とぜんぜん違うということだ。

髪を無月習得時の黒崎一護の髪に、幼い朽木白夜の顔をブチ込んだ感じだ。つまりはボサボサオレンジ頭。

上条さんの影も形もねエベ。

暫くして、周りの大人達は俺の事を疫病神やらなんだと非難する

ようになった。

一年間に三桁単位で車に事故られたらそうなるわな。

周りの女子には何故か氣遣ってくれたが……何故？

そんな訳で高校生ッ！！

学園都市から勧誘（アレイスターの謀略）があつたと、親父が薦めてきた。

たぶん学園都市なら疫病神扱いされないと考えた訳か。氣イ使わなくてイイのに。

まあ、入学費授業料免除＋、実験費が学園都市側から支払われんなら断る理由が無い。

デメリットも多少はあるが、入学費授業料免除。のぼせ上がるつもりはないが、来るべき悲劇の回避には比べられん。

原作道理なら……………な。

アレイスターと生電話（前書き）

主人公のキャラがいまいち掴めない……。。

アレイスターと生電話

どもども。パチもん上条さんこと響夜です。

ごめんなさい、うざいですね。

今、俺は学園都市の窓の無いビルの真ん前にいます。

何だってんなトコにいるのかは、アレイスターに色々と話が有るからだ。

俺の扱いとか。

さて、どうやって入ろうか。

- 1 超メンドイが空間転移の能力者を探して入れてもらう。
- 2 統括理事会経由で暗部に連絡、入れてもらう。
- 3 壁ヲブチ抜ク。

一番穩便は1なんだが、時間が掛かる。俺自身も、空間転移は出来るが、中の構造が判らない。最悪、壁に埋まる。

2はたぶん無理じゃね？

しゃあねエ、3のブチ抜くとしますか。核攻撃でも傷一つ付かないビルだ、

――――本気で殺るかア。

今まで隠していた、近寄るだけで物体が消滅する程の霊圧を解放――瞬だけ出した斬月で指を斬り、切り口から出た血を媒介にして、莫大な霊圧を掌に収束。

「―――グラン・レイ・セ王虚の閃」『ブウウン、ブウウン』……電話か」

タイミング悪いな。……………いや、違うな。

「もしもし？」

『いきなり学園都市が消し飛ぶ程の攻撃をしないでくれないか？』

……………ビンゴ。

俺は窓の無いビルにもたれ掛かりながら、アレイスター「クロウリー」と通話している。

そっぴゃ、「解空」使えば行けたンじゃねエだろうか。

ハイ、単に王虚の閃光
ブツ放なしたかっただけデシタ。

「幻想殺し（俺）を招き込んだんだ。この程度のリスクは承知の上だと思っただが？エドワード「アレキサンダー。おっと、コレはペンネームだったか？アレイスター」

「……………何の事だ？」

「惚ける必要はねエよ、なんなら『冥土返し』^{ハフンキヤンセラ}の確認取ろうか？」

『……………』

「にしても凄まじいタイミングだな。流石『アンダーライン滞空回線』。プライバシーの欠片もねエ」

『……………』

オイオイ、ダンマリかよ。普通に傷付くんだけど。

『……………君は、何処まで知っている……？』

「別に、俺はオマエのプランとやらも、エイワスをどう利用するのかも知らねエ。」

『エイワスの事は知っているのか……。して、君は何のために私に会おうとしたのだ？』

おおっと、確かに話が逸れたな。

「俺は要求しに來ただけだ」

『要求？』

「俺は『システムスキャン能力測定』ではおそらくレベル0だろ。それじゃあ学校の単位とかが稼げない。」

『成る程、確かに幻想殺しは測定できんな。だから単位を免除しろと?』

頭イイ奴は楽だ。イチイチ説明する必要がねエ。

『しかし、私が君の要求を飲むメリットは?』

「俺が此所にいる」

『……………成る程』

幻想殺^{オレ}しが、アレイスターのプランにかなり重要なポジなのは知ってる。

もし、アレイスターが俺の要求を飲まなかったら簡単だ。

俺が学園都市を出ればイイ。そうすれば風斬に自我が目覚めねエさらに俺はアレイスターの生存や学園都市の最高機密であるエイワスを知ってる。そんな奴が魔術側に落ちてみる。

即戦争が起き、魔術側の全ての組織を敵にまわす。つまりプラ

ンが延期、最悪断念だ。

まあ、それは俺も避けたいんでな。

「学園都市に居るつつても基本は、だ。トラブルは幾らか目を瞑ってくれ」

『良いだろう。その要求を「ついでにそれなりの権限ブリーズ」………飲む』

「交渉成立だ。」

よし、これで当面の不安要素は消えた。出来れば悲劇になる前に即解決したいが、今の俺は何も出来ん。

『一つ……いいか？』

「何だ？」

携帯の電源を切ろうとしたら、アレイスターが聞いてきた。

『君は何者だ？』

「………そオだな………」

俺はビルから離れ、歩き出し、

「
-
-
-
-
死神だ」

通話を切る。

アレイスターと生電話（後書き）

主人公の戦闘力がおかしい。

ビリビリとの会合

side 響夜

……えーと、どうも響夜です

俺は、原作通りの学校、学生寮に入り、のどかにノーンビリして……
……た。

過去形だ。なぜなら「何で効かないのよ!？」……………まさかこの俺
が言う羽目になるとは……………不幸だ。

数時間前、俺は盗んだバイクで走り出す訳でもなく、普通に下
校していた。

「いーじゃん、この辺不馴れなんだろう？」

「オレらがエスコートしてやるって」

「あ…あの…」

無理に詰め寄るチン・ピラet c、嫌がる女の子。

……うーわ、なんだろう。

こういつの何度観ても理解不能だわ。

もう描写要らないよな？

こういつの何度観ても理解不能だわ。

嫌がつてるの丸わかりなのに、何が楽しいのかね？お兄さんには判らんよ。

「あー、其処の明らかなチン・ピラ精鋭達。痛々しいから止める。」

「あ？何だテメエ」

「邪魔してんじゃねエぞコラ」

メンチ切りながら、威圧？してくるモブA、B。

「テメエらこそ嫌がつてんのがパツと見て分かるだろうが。ナンパなんざ非効率な事するなら勉強しなさい。勉強。それに彼女は常盤台の生徒だからこんなところをどこぞの幼稚趣味のレベル5に見られたら感電死確定だぜ？」「ンだとコラッ！！」

チンピラたちは、俺の胸ぐらを掴み、俺のポケットにある携帯が零れ、

その携帯を踏み潰した。

……ブチッ

コイツ……先月買ったばかりの……俺の携帯を……
……クロス。

「あ？何か踏んじまっもバハッ!？」

「なっ!……テメエよくボフォッ!？」

俺による、フルボッコタイムが始まった。

後に残ったのは、八墓村だけだった。

「大丈夫か？」

「は、はいっ／＼／＼。あの、ありが」ウチの「にちょっとかいださないでくれる？」……………へ？」

うわぁ……………何でこんなタイミングで超電磁砲娘が？

俺、女の子、地面にめり込んでる複数の墓、御坂御琴（多分）。

……………

沈黙。そして……………

「あー……………KYバカ……？」

ブチイイッ！！

「…………初対面の相手に、有に事欠いてKYバカだああ？」
実際に読めてねエだろ。
女の子を避難……完了。

ビリビリとおぼしき人物の頭からビリビリ。

「バカはお前だああああ！！！！！！」

バチバチイイッ！！！！

ああ、確かに疲れるな。レベル5の善人は。

真つ当な悪党なら、半殺しでも罪悪感も無いのに。

つか、御坂美琴ってこんな迂闊だったか？その攻撃は普通は後遺症

残るわ。(オマエもな!! b y 神)

え? 俺? 幻想殺し無しでも余裕ですよ。(違エよ、チンピラの事。
)

女の子と俺は無傷だが、周りの電化製品が逝つてる。(無視か)

「はあ、はあ」

「あのさあ、ム力ついたからってむやみやたらにバチバチやってんなよ。この娘に被害出たらどうするつもりだ?」

「な!?!?.....何で無傷.....」

何か驚いてるがスルーだ。

「ああいう手合いは丁重にかつ、単刀直入に断つた方がいいぜ。しつこい様ならジャツジメントかアンチスキルに連絡だ。じゃなッ!」

俺は被害者の娘に幾つかアドバイスをしてその場を後にする。

「ちょっと!! 待ちなさい!」

と思つたらなんかビリビリしたのが追ってきた。

瞬歩で美琴の背後に回り、背中に手をあて、

「縛道の六十一」

「なッ……………」

「六杖光牢」

ガンッ！！

六つの光りの板が、美琴の体を拘束する。

「なっ…………何なのよッ、コレッ…………！！？」

美琴はもがいたり、電撃を身体中から出しても、六つの光りの板はびくともしない。

「ソイツは五分位で消えるようにした。」

「説明しなさいよ！！」

「じゃあな」

美琴の断末魔（違う）を無視し、瞬歩で自宅まで移動する。

この出来事のせいで、ネットで『アクロバット超人』という意味不明な都市伝説ができたことを、響夜は知らない。

ビリビリとの会合（後書き）

少々怖いですが、感想待ってます！

セブンスミスト（前書き）

話進まねエ……………。

セブンスミスト

side 響夜

——第七学区の洋服店『セブンスミスト』――

俺は下校中に、女の子が洋服店への道を聞いてきたから案内してきたところだ。オシャレがしたいみたいで、一緒に洋服選びも手伝ってあげている。

こういった素直な子供の頼みは弱いな。

誤解が生まれる前に言っておく。

俺は青髪ピアスみてエナド変態ロリコンではない！！

俺の好みは年上で、いつもは凜としているが、可愛いさをたまに魅せるようなお姉さんだ！！

つか俺の好みはどうでもイイ。たしかここは、『グラビトン虚空爆破事件』

のある場所だ。

ここで俺が居ないと、最悪御坂達が死ぬ。それは勘弁願いたい。

..... なーんか、ガキっぽいパジャマ
を持った挙動不審なビリビリ娘が見える。

思わず携帯に録画してしまったではないかッ。

傍から見たらスツゲエ怪しい。そろそろ嚴重注意でもするか

「ジャッジメントだ。一体君はなにをしている」

「——ッ？——ッ!？」

声無き絶叫。いや慟哭？

「な、なんであんたがここにいるのよッ！ていうか、ジャッジメン
トだったの!？」

「ンな訳ねエだろ。オマエが余りに挙動不審だったから注意しよ
うと思つてな」

「なっ！？だっ、誰も拳動不審なんかしてないわよ！！／＼／」

録画した映像を観せると、真っ赤になってやんの。カーワイイ。

何だかんだでパジャマ隠してるし。なに恥かしがってやがる、オマエの幼稚趣味は衆知の事実でしょうに。

「おにーちゃん。このおようふく…あ、トキワダイのおねえちゃんだ。」

「昨日のカバンの子…。」

「なんだ、知り合いだったのか？」

まあ、原作で知ってはいるが、一応聞いとかないでもない。

「うんっ！！まえにいぬから、わたしのかばんをとりかえしに行ってくれたんだよ！」

「ほう。」

「な、何よ？」

「いや、感心しただけだよ。偉いじゃあねエか」

「ふ、フン／＼／別に当たり前よ！！」

御坂さんや。何故そこで顔を赤らめてるんだい？（；|Д|）？

貴方はそこは『ガキ扱いすんじゃないわよ！！』ではないかい？

「というか、お兄ちゃんって…アンタ妹いたの？」

「違わい。俺はこの子が洋服店さがしてるっつーから案内してただけだ」

「あのね、オシヤレなひとはここにくるってテレビでいったの。わたしもオシヤレするんだもん！」

こんな子供でも女の子なんだなあ。

「へえ、それはさておき。勝負しなさい！」

「オマエのドタマにやそれしかねエのか」

『何がさておき』だ。なんつー話題転換能力。想像の遙か斜め上

をいきやがるわ。

お父さんに言いつけるぞッ！！

ちなみに、御坂旅掛って名前。職業は世界に足りないモノを示すお仕事。

かの学園統括理事長、アレイスターに個人回線も持ってる。『冥土返し』級の重要人物だ。

「だいたいこんな子供の前で始める気かよ。」

「う…。」

「文句があるならすぐに視界から消えてやるからよ。」

どの道、事件発生まで大した用事はないしな。

side 美琴

むう……アイツこういう時は正論出してくるのよね……。

確かに周り見てなかったけど……。

我ながら見境ないなあ。

「どうもアイツが絡むと調子が狂う………ん？」

あの人が持つてるのぬいぐるみは………ゲコ太ッ
！？

……じゃないか。って、全然似てないわ。

でもあの人、あんなところでぬいぐるみ持つてなにやってんだろ？

「あれ？佐天さん、あの子は？」

佐天さんと初春さんしかいないし。

「あの子もお手洗いに……行き違いになったみたいですね」

「もしもし？白井さん？」

初春さんが電話してる。相手はどつやら黒子みたいね。

「御坂さん！」

「？」

セブンスミスト（後書き）

次話はだいたい出来ているので早目に投稿できると思います。

感想待ってます!!

虚空爆破事件（前書き）

無理矢理主人公を押し込んだ、成れの果てが……（ - . - . ; ）
タグに超電磁砲もつけたほうがいいかな…？

虚空爆破事件

『聞いてます？お姉さま』

『聞いてるわよ。連続爆破事件とかいうやつでしょ』

美琴は自動販売機に蹴りをいれながら答えた。

『正確には連続虚空爆破事件ですの』

アルミを基点にして、重力子の数ではなく速度を急激に増幅させ、それを一気に周囲に撒き散らすことで、爆発を生み出す。つまり -
-
-

『「アルミを爆弾に変える」能力ですの - - -』

「何ですって！？この店が標的？」

「そうみたいです。すみませんが、避難誘導に協力してもらいますか？」

「わかったわ！」

美琴達は迅速に避難誘導を進めた。しかし、彼女らは失念していた。

『初春ッ！！初春聞きなさい！』

「今、全員避難したか確認を……」
『今すぐそこを離れなさい！！』

白井は必死に叫ぶが、時既に遅い。

『過去八件の事件の全てで、ジャッジメント風紀委員が負傷してますのッ！！犯人の真の狙いは、観測地点周辺にいる風紀委員！！！！』
『ジャッジメント』

『今回のターゲットはあなたですよ、初春ッ！……！』

失念していたのは二つ。一つは犯人の目的。

「おねーちゃん」

「これ、メガネをかけたおにーちゃんが、おねーちゃんにわたし
てって」

少女が持っていたものは、美琴が先程見た、アルミ入りのぬいぐ
るみだった。

「（あれはさっきの……？）」

二つ目は………犯行方法。

「ッ！！？」

初春はとっさに女の子を庇い、美琴に伝える。

「逃げて下さい！！あれが爆弾ですッ！！！」

「（・・・・・・・・レールガンで爆弾ごと吹き飛ばす！！）」

美琴はポケットからコインを取り出すが、

ポロッ

「（マズった！！間に合・・・・・・・・）」

ドンッ！！！！

人氣が全くない路地裏。

眼鏡をかけた学生、介旅初矢は笑みが止まらなかった。

「ククク……」

自然と言葉が漏れ出す。
優越感に溢れた笑みだ。

「いいぞ、今度こそ逝つただろっ」

ついさつきセブンスミストで、ジャッジメント風紀委員に能力を試し続け、威力はレベル4相当のものだった。

結果、ビルの壁が爆風で吹き飛び、炎が燃え上がっていた。

「スゴイツ！スバラシイぞ僕の力！！徐々に強い力を使いこなせるようになってきたッ！！」

彼の歓声は、路地裏にこだましていく。

「もうすぐだ！もう少し数をこなせば、ジャッジメント無能な風紀委員もアイツ
ラもまとめて……」

が、突然、介旅の身体が吹き飛んだ。

理由は簡単。

後ろから近付いた少年に、蹴り飛ばされたからだ。

壁と地面に衝突し、そこら辺のゴミ箱が倒れた。

「ぐがッ……………一体何が……………」

介旅は訳がわからず、呆然とする。

「よオ、ウンクス」

顔を上げると、そこには男が立っていた。

ぼさぼさなオレンジ髪で、綺麗に整った顔、

「用件は言わなくても分かってるよな、爆弾魔」

そう、上条響夜だった。

虚空爆破事件（後書き）

形を作れば話が進まない。次回はそけぶができるかな？

感想待ってます。

強さ（前書き）

連・投ッ！！

強さ

side 三人称

数分前 - - - -

『お客様にご案内申し上げます。店内で電気系統の故障が発生したため、まことに勝手ながら、本日の営業を終了させていただきます』

来やがったか、まずは御坂達を捜すか。

『^{ベスキス}探查神経』を全開にする - - - - !

『^{ベスキス}探查神経』は^{アランカル}破面の基本能力で、死神の霊圧探查能力より優れている。

AIM拡散力場は霊圧と感覚的には似てるし、レベルによって大きさが違う。おそらく天使の力も同じだろう。

テレスマ

今、此处には、第三位の御坂美琴がいる。レベル5クラスが目印なら、捜し出すことは容易い。

「見付けたッ――！」

すぐさま御坂達の元へ向かうが、

「――逃げてください――あれが爆弾ですっ――！！！」

既に爆発寸前。しかも美琴もコインを落とし、顔も絶望に染まっていた。

「（展開早すぎるだろ――！！）」

ドンッ！！！

爆弾は爆発し、『虚弾^{バラ}』で爆弾ごと消し飛ばすことも、幻想殺しで防ごうとしても、爆風の範囲が広すぎて初春や女の子は守れても、美琴を護る事が出来ない。
・

響夜は反射的に斬月を抜いた。

- - - 月牙天衝！！！！

斬月から放たれた斬撃で、美琴達に向かう爆風を斬る事で、美琴達を守ったのだ。

- - - 現在。

「な、なんのことかな……。僕にはサッパリ……」

介旅は動揺しつつも、冷静だった。

「まあ、確かに威力はたいしたモンだったなア……でも残念」

しかし、少年はわざと前置きを言い、追い討ちをかける。

「死傷者どころか、誰一人かすり傷一つ負ってなねエゼ。流石はウ
ンクズ（笑）」

「そ、そんなバカな！？ 僕の最大出力だぞ！！」

「ほオ」

「！！！」

誘導尋問のようにボロを出してしまった介旅は、取り繕いながら、カバンに手をやる。

「いやあ、外から見ても凄い爆発だったから……」

そのまま、カバンから取り出した、スプーンを少年に向かって投げつける。

「助からないじゃないんかって!!」

ドゴンッ!!!

重力子の急加速させて爆弾とかしたスプーンの爆風は簡単に少年を包みこんだ。

「は、ははは……………は？」

が、

少年は突き出した右手で爆風を防いだ。右手に宿る幻想殺しで。

「ガフッ!？」

響夜は即座に介旅を殴り（滅茶苦茶手加減した）、地面に抑えつけた。

「暴れるのはイイが、今の俺はこれ以上加減出来ねエぞ」

実際、響夜が本気を出せば、介旅の体どころか、太平洋が割れて

しまつだろつ。最悪、地球さえ。

「ハハハ……いつもこうだ……」

「あ？」

「何をやっても、僕は地面に……擦じ伏せられる」

介旅の顔が憎悪に歪む。

「殺してやるッ！！お前みたいのがいけないんだ！風紀委員だつて……」

「力がある奴は皆こうなんだろッ！！」

「……………それで？」

「何…？」

しかし、響夜は全く表情を変えなかった。いや、視線だけは怒りに染まるり

「それで風紀委員や初春達が何かオマエに実害を与えたか？」
ジャッジメント

「力、チカラ言ってるが、オマエが弱いのは、力の有る無しじゃねエ。」

「何だと……！？」

「オマエがさっき狙った初春は情報処理能力は高いが、実践では唯の中学生だ。だけどそれでも初春は逃げ遅れた女の子を守ろうとした。」

「あの時の初春は強力な能力なんて無くても、オマエより遥かに強かった。オマエの弱さはその有り様だ。」

響夜は介旅を立たせ、真っ正面から言葉をぶつけた。

響夜は霊圧は微塵も出していなかったが、その言葉は介旅にはとても重く感じた。

「テメエがやった事は赦せねエし、テメエにも事情が有るみてえが、先ずはその力に依存した幻想は、今ここでぶち殺してやる。」

「歯ア食いしばれッ!!」

響夜の拳が介旅にクリーンヒットし、介旅は気絶した。

気絶した介旅と、右手を見ながら響夜は呟いた。

「俺は上条当麻じゃない。それでも俺は、コイツの幻想を殺せた
だろうか……」

呟き終えた響夜はその場を後にした。

現場の一部始終を見ていた美琴に気付きながらも。

強さ（後書き）

何時になったらインデックスは出てくるのだろうか。

たぶん次回は、響夜が美琴と逃げずにバトります。感想待ってます！

しよーぶ（前書き）

やっと美琴とのまともなバトル。少々ご都合がはいってるかもです。

しょーぶ

side 響夜

ATM。現金自動預け払い機、Automatic teller machine。

通常、紙幣（及び硬貨）、通帳、磁気カード等の受入口、支払口を備え、金融機関や貸金業者、現金出納を行う業者の提供するサービスが、顧客自身の操作によって取引できる機械を指す。

元々は都市銀行の店舗に設置され、普通預貯金の預け払いに用いられたが、今日、金融機関はもとより、小売店や公共施設などに幅広く設置されている。

また、普通預金以外の取引や現金を介さない取引も広く取り扱うよう進化しており、自動取引装置、自動窓口機などとも呼ばれている。

- - - - - そんなATMにカードがつまったら、皆はどうする - -
- ?

なーんて現実逃避は置いといて、……マジでどうするッ……！！！！

現在俺は、コンビニに来ている。コンビニのATMから生活費et
cを取り出すためだ。

しかし、例の例の例によってATMに入れたカードが飲みこまれて
いる。

原作の当麻は、結局御坂が来て何とかなったが、そんなモンを待つ
てる場合じゃない。つか来るのも怪しい。

ATM本体には、出来るだけアプローチはかけたが、うんともそん
ともしない。

どうする……どうする……どうするッ……！！

なんてアホやってないで店の人に聞か。

「俺が悩む必要ねエじゃねエか。そうすれば一発d『ティロリロ』」
『……………』

解決方法が浮かんだ俺に待っていたのは、

「久しぶりね」

「ビリビリ中学生……」

ビリビリ中学生こと、御坂美琴嬢だった。

次回に続くッ……！

「すみません店員さん、カードが出てこないんですが」

「判りました、少しお待ちください」

「……ねえ」

ピピッ

「はい、これでよろしいですか？」

「有難うございます。助かりました」

「無視すんな!!!!」

チッ、もう少しで誤魔化せたのに……。

「何だよビリビリ中学生。オマエの出番は次話だろうが」

「意味分かんないわよ！ていうかビリビリゆーな！！今日という今日は、決着をつけてやるんだからっ！！！！」

「勝負勝負って今までオマエの全戦全敗じゃねエか。」

ちなみに、あれから何回か鉢合わせになったことがあったが。結局おちよくり倒して終わっているが。

というかアレは勝負になってたか？

「うっ、うるさい！わたしも攻撃受けてないからお会いこよー！」

「ハイハイ、わかった、わかりました。やりやあいんだろ、やりや」

下手に逃げたらまたデキレースになっちまう。

ヤル気スイッチオンッ

取り敢えず気迫だけ出してみる。

「ッー！！………漸くヤル気になったみたいね………！！」

「でもコンビニですの話じゃねえだろ」

「うっ、うるさい！」

キングクリムゾンッ！！

人気のない橋の上に到着！！

しまったアアアアアアアアアアアア！！！！此処、自宅付近だアアアアア！！

人知を越えた頭脳はどうしたアアあ！？俺ただの学力良いアホじゃねえか！！（今さらきずいたか

アイツに場所指定させんじゃなかった……。

「行くわよ！！！」

もう始めちゃってるしっ！！

side 三人称

美琴は、様子見の為に雷撃を響夜に放つ。
それを響夜は、難なく右手で防ぐ。

だが、それは美琴も何度も見た。

「やっぱ電撃は効かないか……………ならっ！」

磁力を利用し砂鉄を集め、剣を作り出す。

不意に落ちた木の葉が剣に触れ、綺麗に真っ二つになる。

「うーわ、何ぞソレ」

「砂鉄が振動してチェーンソーみたいになってるから、触れるとちよーっと血が出たりするかもねっ！！」

美琴は砂鉄の剣を響夜に向かって振り下ろす！！

「舐めすぎだろ」

が、美琴が振るった砂鉄の剣を、響夜はあっさり打ち消し、強制的に砂鉄に戻される。

当然と言えば当然だ。

確かに砂鉄の剣の切れ味は抜群だ。

しかし、響夜は千年を越える死神と、虚としての経験、技術がある。そして高次元に進化することで、神の領域に片足突っ込むどころか、300キロバイクでブツとばした状態にいる。

真剣どころか竹刀すら持ったこともない美琴の振るう剣など、蠅が留まっている棒に等しい。

しかも剣は、右手で触れるだけで霧散するのだ。響夜にとっては脅威になるはずがない。

しかし美琴もバカではない。
流石に一振りで打ち消されるとは思わなかったが、ここまでは予想通り。

「（砂鉄が消されず残ってるなら……）私がアンタを舐めると思う？」

「なるへそ。地面から砂鉄集められんなら、大気中もってか。本ツと応用効くな。その能力。」

「それだけだと思わないことね!!」

響夜を狙うのは空中の砂鉄の剣だけではない。この橋を指定した、最大の理由。

「おまツ、鉄橋の鉄骨まで!!?」

砂鉄の剣で切り裂かれたモノや、恐らく抜いても大丈夫な鉄骨を、某アーチャーの様に、響夜に向かって狙いを定めていた。ここまですで充分響夜の予想外。

さらに。

「いくわよ……」

レールガンを撃つ際には美琴はいつもコインを使っていたが、別にコインでしか撃てない訳でわ無い。

「なッ!？」

そう、例えば鉄骨でも……!!!!

「アンタは多角同時攻撃は打ち消せない。それは今までの戦いで解った「アレは戦いと呼べねエだ」解った!!」

幻想殺しは右手限定。全て触れるが、完璧に全てを打ち消せるかは

判らない。

「喰らえッ！！！！！」

伸縮自在の複数の砂鉄の槍と大量の鉄骨の矢。だめ押しの大型レールガン。

これ等全てが打ち消されず、響夜に放たれた。

だって安かったんだもん。(前書き)

修正しました。

思い出すと、かなりム力つくが、それは置いといて、

自信の力を触れるだけで打ち消し、人間では有り得ない身体能力で壁を登り、正体不明の力を使う。

――――そんな奴が『無能力者（レベル0）』？

まず有り得ない。しかし、バンクをハッキングし「したんかい」…
しても、アレの再現を可能にする能力は無く、彼自身も無能力者と
されていた。

何故？

判らない。

知る手段は、彼に勝って秘密を吐かせるしかない――――！

一斉攻撃のせいで土？煙が出ていて、アイツの姿が見えない。

能力が打ち消された様子になかった。ならばダメージは通ったはず。

風が吹き、煙が晴れる。そこには――――――

「いやはや、直撃してたら人間普通に死ぬぜ。あんなものを人に向かってブツ放しちゃいけませんって、お母さんに習ったでしょっ」

――誰もいなかった。

トンツと背中に拳が当てられる。

響夜は攻撃が当たる瞬間、回転をかけた特殊な瞬歩で相手の背後に回り込こんだのだ。

「『閃花』……チェックメイトだ」

とはいえ、響夜は常に霊圧を抑えているが、時空が歪むほどの重力の奔流を起こす鬼道を、ただ片手を振るうだけで破壊できる。

仮に直撃しても、ダメージは無かっただろう。

……負けた。

美琴は勿論悔しかったが、ちゃんと戦ってくれた事が、何故か嬉しかった。

「一つ……聞いていい？」

「なんじゃらほい？」

誰だお前は、キャラ崩壊にも程があるわ。

思わず口に出しそしだが何とか押し留めた。

「この前……セブンスミストであつた事件の時、何で名乗りあげなかつたのよ」

「……………」

「爆発から、初春さん達や私を助けたのも、爆弾犯を捕まえたのもアンタじゃない。なんで……………」

「……………決まってるだろ、そんなモン」

ずっと後ろを向いていた美琴が振り返り、目にしたのは……………

-
-
-

「……だってタイムバーゲンだったんだぜいっ!!!」

とても………イイ………笑顔だった。

つか、いつの間にか右手にしつつかりと、スーパーの袋が。

まあ………、無論、嬉しさとか悔しさとかは一瞬で粉微塵。

美琴の怒りが天元突破。

「フ……フフフ……」

「ほ？」

「そうね……私らしくもなかったわ。ずっと心の何処かでブレーキをかけてたのかもね。」

御坂美琴真正銘の全力全開。分かりやすく言えば――

「雷……雲？おい……ちょっと待て。なんでそんな流れに……世界の修正力ッ……！？俺はいいが……んなモンブチ落としやア……周囲の電機機器がッ……待て……やめッ」

そう、家族（電化製品）が逝く――

響夜が最も恐れていた事態である。

「私らしくなかったわ――！」

「イアアアアアアアアアアアアアアアアアア――！」

10億ボルトの雷が、響夜さんの心（冷蔵庫とかクーラーとか）に
いろんな意味で容赦なく墜ちた。

だって安かったんだもん。(後書き)

主人公完全キャラ崩壊。

次回、腹ペコ白シスター登場。

第一章、禁書目録開幕。（前書き）

原作とあんまり変わらねえ………

第一章、禁書目録開幕。

side 響夜

茹だるような暑さの中で、目が覚めた。

「暑い……。御坂の奴、後で腹パン咬ましてやる……………!!」

クーラーは勿論、冷蔵庫まで死亡……。

最悪のケースを予想し、あらかじめ中身をクーラボックスに入れ
といて良かったぜ。いやマジで。

「今日は、夏休み初日か……と云うことは……………」

意を決して、ベランダの窓を開ける……………

「……………シジュール……………」

其処にはベランダで洗濯物の様に、銀髪シスターが干されていた。

この日、全てが始まる。

コイツへの率直な感想は――返事がない、ただの屍の様だ。

うん、コレがいいじゃん。

「お……………」

「……………お?」

ベランダに干されながら屍――白シスターは呟いた。……………

怖っ

「おな……」

「お腹いっぱいでも食べられないか。よし判つ「お腹減ったから何か食べさせてくれると嬉しいな！！！！！！」……」

永くこの世界に来て今更だが、コイツは頼んだら何でもしてくれると思つとるんじゃないな。

「ふーん、あつそう。俺は大して嬉しくない」

ベランダの窓を締め、ロックオン！！

その後、インデックス？の目が『自動書記』並に虚ろになってきたから、仕方無くベランダの封印を解いた。

俺の朝飯ついでに、元柳斎の千年懸けて精錬された料理をくれた。

「お……美味しい……」

涙流す程か、……元柳斎エ……何を極めてんだよオ。

「とても美味しい料理ありがとう！ご馳走様！！」

「お粗末様。ンで、先ずは自己紹介プリーズ」

「んっ、私の名前はインデックスっていうんだよ」

「意味わかってんのか？……まあ、いい。俺の名前は上条響夜だ。それで、何でオマエはベランダに干されてたんだ？」

すると、インデックスの顔が真剣になる。

「追われてたんだよ」

「……誰……いや、何に？」

「魔術結社だよ」

「……」

パドックス効果はないようだ。ポジションは元々あったモンだからな。

「驚かないの？」

ん？やはり不思議だったか？

「まあ、魔術自体は知ってるしな。ていうか、学園都市のトップ元魔術師だし」

「ええ!？」

「それで、何でそんなモンに追われてんだ？」

すると、インデックスが俺の眼を見定めてる様に視ている。

暫く見たら目を閉じた。

「……うん、貴方に話しても大丈夫だと思う」

「いいのか？てか、そんな簡単に信用しても」

お兄さん心配になってくるよ。

「大丈夫、貴方の眼には悪意を感じられないもの。貴方の眼は、とても深くて吞まれそうだけど、それ以上に安心出来るんだよ」

どんな眼だよ。

その後、インデックスは自分が十万三千冊の魔導書を記憶していることを俺に話した。

まあ全部知ってるが。

「そういうことなら俺が匿うか」

sideインデックス

「そういうことなら俺が匿うか」

嬉しかった。冗談でも……いや、冗談じゃなく本当に心配してくれて、そんな無茶な事を言ってくれる事が、心の底から嬉しかった。

「駄目だよ。」

「……気持ちは嬉しいけど、それは出来ないよ。私を匿うと君も危ない。いつまでもここにいと、連中ここまで来ちゃうかも部屋ごと爆破されたくないよね？」

「アホ言え。別にオマエが心配なんじゃねエ、昼飯ただ食いさせるとでも思ってたのか？」

嬉しかった。返答になんかなってないのに。

そうやって、私がここから出られなくする口実をつくってくれる。私を匿うデメリットの方が、よっぽど多いのに。

でも、

だからこそ

嬉しかったからこそ、彼を巻き込みたくない。

彼を確実にこんな禁書目録（化け物）から遠ざけないと。

- - - 彼を、護るために - - -

「……じゃあ。私と一緒に地獄の底までついてきてくれる？」

「行かせねエよ。んなトコなんざ」

彼………きょーやは私の頭を撫でた。まるで、見えない鎖から解き放ってくれる様に。

「んじゃ、俺は学校に野暮用で逝ってくるわ。くれぐれもどつか行ってんじゃねエぞ」

s i d e e n d

少年は進む。全て物語をハッピーエンドにするために。

そして、少年は知らない。

少女の『衣服（歩く協会）』を還付なきまでにブチ壊されて、焦りまくっている事をwww（笑）

第一章、禁書目録開幕。（後書き）

感想やコメント、待っています。

格の差（前書き）

注：主人公は能力限定で、ブリーチの藍染死神状態位にまで、力を抑えています。

格の差

夏休み。

それは、夏の暑さに蝕まれている学生にとっては、救世主メシアに等しい。

中には、補習という日頃から行いが悪く、違反している生徒は対象外だが。

そして彼、上条響夜は上記に当てはまらない………筈だった………。

学力。というか普通の学校ならオール5を採っているだろう。

しかし、此処は超能力の都市。

超能力を、使えない。それは大きなハンデである。

『幻想殺し』

ありとあらゆる異能を打ち消す、彼の右手に宿る不可解で、不明で、理不尽な力。

この力の意味を知っている者は現時点では世界で片手の指より少ないだろう。

ある意味、この力が無ければ彼の運命はまるで違っていただろう。

平凡で平常で平和だったのだろう。

本来その右手と右手が抑えているモノ以外は平凡な少年だっただろう。

しかし、彼はそれ以外の力を持っていた。

指一步動かさずに、人類を殺し尽くせる天使（神の道具）を、軽くあしらえ、神と呼ばれている存在すら凌駕する。

三次元に位置する存在は、彼の力の強大さを、巨大さを、絶大さを感じとる事さえ叶わない。

そんな圧倒的な力が。

話が逸れたが、実験都市である学園都市の最重要課目、記録術かいほうが大きく単位に影響する。

故にどれ程頭脳が良くても、超能力が使えなくては補習を受けざる得ない。

だが、彼は学園都市のトップである学園統括理事長アレイスター「クロウリー」との取引で補習を受ける必要も、単位の心配もないのだが。

「何でカミジョーちゃんが統括理事会の命令で『彼の大学までの単位を与える』なんて命令がでてるんですか！？。センセイは教育者として認められないのです！明日、ちゃんと説明してくださいです！……！」

………なんて理由で、一蹴されたいた…。

やはり、世界の流れは変えられないということか。

side 響夜

「さあ！先生にちゃんと説明してくださいです！！」

不肖、上条響夜。かつてない危機に晒されているッ！！！

此処までの経緯。

一応、呼ばれているから、仕方なく登校――――↓じゃんじゃん
先生に拉致――――↓特別指導室へ――――↓現在ッ！！！！

小萌先生とはッ、明らかに見た目小学生なのに、大卒で正規の手順で教師になったり、かなりの喫煙者で、教員達には『ホワイトスモーカー』と呼ばれる、リアル合法口リなのであるッ！

フム、どうするか。出来れば小萌先生に嘘は出来るだけつきたくないからな。

……ある程度ぶっちゃけるか。

「判りました先生。説明しましょう」

「は、はいっ。どんな家庭事情でも先生はドンと来いなのです」

珍しく俺が真顔になったのか、少し動揺してる小萌先生。

だがその前に。

パンパンッ

手を叩くのをトリガーに二重断層結界を展開。

これで『アンダーライン滞空回線』にも会話が漏れることはねえ上、認識出来なくなっただ。

小萌先生は訳がわからず可愛らしく、頭を傾けた。

青髪ピアスなら襲ってんだろうが、俺はロリコンじゃあねエ。

「先生、先生はどんなレベル0でも極弱ながらもちゃんと能力を持っていて、AIM拡散力場を発生させてる事は知ってますよね」

例えば土御門の《肉体再生》とか。

「はいです」

「しかし、俺はそのAIM拡散力場を全く発生させていません」

「!？」

「それは俺が生まれつきに持っている《幻想殺し》が原因なんです」

「……どういう事のですか？」

今度は小萌先生の空気がかわった。

俺は幻想殺しをある程度買いつまんで説明した。

俺は《記録術^{かいほつ}》以外の成績はほぼ満点。幻想殺しが無ければ、確

実にレベル4以上はいつてるだろう。

この事に内心納得してはいないが、一応小萌先生は俺を解放してくれ、今は帰路に着いている。

インデックスの食欲を満腹中枢などで何とかしようと考えながら、缶コーヒを飲んでいると（ステイルなんて眼中に無い。）

……ビキッ
と、缶コーヒが俺の握力に悲鳴を挙げると共に、

「あ……！……いたいた、やっと見付けたわよ……！」

家族（電化製品）の仇が現れた。

「あつ、いたいた。この野郎！ちょっと待ちなさ………ちょっと
！アンタよアンタ！止まりなさあってば！！」

「チツ面倒な奴が来やがったな……。何の用だよ」

「そんなの決まってんでしょ、今日という今日こそ決着つけてやるんだから！！」

意気揚々とやる気出してますッ！！と言わんばかりに前髪から電気をバチつかせてる美琴に対し、響夜は心底鬱陶しい顔を浮かべる。

「喧しいわバトルジャンキー。決着もクソも、昨日全力出しても傷ひとつ付けなかったのに何ほざいてんだバカ？」

「……ッ！！」

ギリギリと美琴は奥歯を噛み締めて、

「あ、あんなの無効よ、あり得ないわよ！私だって一発も殴られてないもん、それってお互い様で引き分けて事でしょ！！」

両手をブンブン振り回して叫ぶ美琴に、響夜は小さく溜め息をついて、

「…………じゃあ、マジメにやってもイイのかよ」

殺気の込めた霊圧を浴びせた

か…………ッ、と美琴の言葉が詰まる。

普段の響夜なら、こんな対応はしないだろう。

だが、美琴は響夜の家族（電化製品）を殺し（壊し）たのだ。

御坂美琴の全身からブワツと嫌な汗が噴き出す。

立ってなどいられる訳もなく、呼吸すら儘ならない。

「……………ああ……………あつ……………ッ」

美琴の頭には、自分の力を打ち消した疑問や敗北の屈辱の事などなかった。

格の違い、等の話ではない。生き物としてのレベルが違いすぎる。

虎穴にいらんずば虎児を得る。とは言うが、待っていたのは龍だった。

美琴の意識が遠退きそうになったギリギリの時、響夜は霊圧を抑えた。

「ハアッ…ハッ…ハア…」

「女子中学生には、ちとキツかったか。悪いな、ちょっと気がたっていたわ。」

「ッたく、朝は魔術師、昼はビリビリ中学生と来たモンだ。」

響夜は少々自傷気味にため息を吐き出す。

「じゃあなビリビリ。バトルジャンキーは直しておけよ」

踵を返す響夜に、美琴は呟くしかなかった。

「魔術師って……………何？」

格の差（後書き）

ストックが尽きたので毎日更新が難しくなります。申し訳ありません。

感想、コメントなど待っています！

魔術師（前書き）

ちよい短め。

魔術師

side 響夜

今日び諭吉十人分ッッッ！！！！

ハハハハハハ！！！！素晴らしきは奨学金ッ！！

更に統括理事長権限で、昨日の灼熱の地獄から人間の宝具クラーにより解放された！！

御坂美琴ビリビリという羅生門を突破し、ファミレスで満足し、悠々と陽の落ちた学生寮まで戻ってきたぜッ！！

つーかマジで人気がひとけねエな学生寮。

だぶん夏休み初日だから、みんな街に出て、バカやってんだろ。

とても気分がハイッだったため、七階までジャンピングしてしまっ

た。回り人いなかったし勘弁してくれ。

「あ？」

なーンか忘れてたな、と思いながら七階通路でガツチャガツチャと、俺の部屋のドア前で清掃ロボットがたむろっている。

待て、忘れるだと……？

原作で、こんな光景が有ったような……………。

インデックス……夏休み初日……魔術……清掃ロボ……ステイ

- - - - - ツ思い出した！！

「インデックスッ！！」

原作と同様、清掃ロボットが反応してたのはインデックスの傷口から出た血だった。

畜生ッ！！早く思い出していたら………ちょっと待て。俺の完全記憶能力はどうした……！？

俺は、下校まで、原作や他のことを忘れたらことはないぞ。つまり完全記憶能力は付与されてある。

御坂の時もそうだ。確かにツツコミでアレだったっていうのもあるが……俺はあの時、まるで金縛りにあったように動けなかった。

これは偶然か？それとも……いや、先ずはインデックスだ。

「この傷をつけたのは……」

「うん？僕達『魔術師』だけど？」

神裂だろうな。と言う前に現れたのは、赤髪長身に神父姿の白人。おそらく、魔術師ステイル「マグヌス」。

目元のバーコードとピアスと煙草で、神父らしさが欠片もない――
- 原作通りだ。

「テメエがやった――――なわきやねエわな。こんな太刀筋、刀じやねえとつけられねエ。」

するとステイルは、関心するように口から煙を吐いた。

「へえ、ただの一般人だと思ったけど、裏の人間かい？」
「うちひ」

「ちげーよ、人一人殺したことの無い奴を、裏の人間と呼べるか？」

成る程。と納得しながらタバコを深く吸い、また吐く。

「確かに君からは血の臭いがしない。じゃあ聞くが、その子を回収する。邪魔をするかい？」

「愚問だろ」

俺はインデックスを庇う様に、ステイルの前に立った。

取り敢えず、インデックスの傷の悪化を防ぐか。

『双天帰盾』は、外側からの攻撃に脆い。万が一、余波喰らったら
終わりだ。なら――

「五養蓋ごようがいに結界10層を付与」パチパチンと、指を鳴らしインデッ
クスの回りに結界を展開。

「?!」

これでインデックスの時間を疑似的に止めた。更に九十番台の鬼道
並の攻撃は防げる。

「魔術? いや、超能力か……まあいい。何をしたか解らないが、君
を殺せば小細工も出来なくなるだろう。」

「俺を殺す………か。ハッ、何様のつもりだデメエ?」

ステイルは、タバコを捨てながら表情を歪ませた。

「ステイル」マグヌス……と名乗りたい所だけど、ここは F O
r t i s 9 3 1 と言っておこうか」

「『我が名が最強である理由をここに証明する』？随分自信満々な魔法名だな、ステイル」マグヌス。それとも自信過剰か？」

堪にさわったか、それとも何故魔法名を知っているかを疑問視し、さっきまでの笑みを消す。

「ああ、魔法名はインデックスから教えてもらった。別に変な勘繰りしなくていい。」

「……フウ。確かに気にしすぎだったようだ。魔法名を知っているなら、その意味も知っているだろ？」

「殺し名……だろ？」

ステイルはその言葉を聞くと、まるで戦いの合図のように、隠していた殺気を明確に現した。

それと同時に、俺もステイルに突っ込む。

俺にとって、初めての対魔術師戦の開幕だ――！！

魔術師（後書き）

今まで、ステイルのファミリーネームがマグヌスではなく、マグネ
スと勘違いしていた今日この頃。

魔女狩りの王（前書き）

調子ブツこいて連投。

魔女狩りの王

「炎よ――――」

ステイルが呟いた瞬間、右手に炎剣が生み出される。

「――！」

流石に響夜も、三千度の熱に人としての条件反射で足を止める。

「――巨人に苦痛の贈り物を」

ステイルは笑いながら、灼熱の炎剣を横殴りに響夜へ叩き付け、

響夜にそれが触れた瞬間に、火山の奔流のように爆破した。

熱波と爆音と黒煙が吹き荒れる。

「やり過ぎたか……な？これじゃあインデックスを回収出来ないな」

余りの熱に、結果など見なくても判りきっている。今は摂氏3000の地獄。人間など、ヘドロのように溶けてしまう。

「御苦労様、お疲れさま、残念だったね。ま、そんなんじゃ1000回やつても……」

相手が人間ならば。

「勝てないツてかア？」

ドクン、と黒煙の中から、莫大な霊圧が、ステイルを刺す。

火炎と黒煙がいきなり引き裂かれるように、

上条響夜はそこにいた。

「そっくりそのまま言い返すぜ、残念だったな。テメエじゃ1000回やつても勝てねエよ」

実際に魔術を消した事がないからこそ、響夜は足を止めたのだ。

確実に右手で炎剣（魔術）を掴む為に。

「爆発はつい最近喰らったばかりなんでな。打ち消し方のコツは掴んでんだよ」

「――――、な」

理解不能。ステイルの頭が叩き出した感想は、それに尽きていた。

先の攻撃が不発かどうかは、周囲の状況を見れば一発で解る。

ならばあの少年は、どうやって自分の攻撃を防いだのか。

少年は摂氏3000の熱に耐えられる体構造をしているのか？

まあ、響夜が聞いたら、イエスと答えそうだが。

ステイルは、頭の混乱を収められない。

しかし響夜はそんなことなど知ったことではない。

「チツ!!」

ステイルは、魔術師としての経験に従い、後ろに飛び退きながら、炎剣を作るが、

「遅せエよ」

「!!」

響夜は、バスケットボールのディフェンスの様に、ステイルに張り付いていた。

反射的に炎剣を振るう。

爆発が起きる。

火炎と黒煙が撒き散らせ、吹き飛ばされた後には。

やはり響夜は無傷。

ステイルは響夜を引き剥がす為、もう一度炎剣を作ろうとしたが、響夜は同じ事だと断定し、させてたまるかと言わんばかりにステイルの横っ腹へ蹴りを射れた。

「ゴッ…ガッ…（何だこの動きは！？こんな蹴り、聖人でもない限り…！?）」

響夜は手加減はしたが、確実に骨が何本か折れた。

本気でやったら、ステイルの上半身と下半身が「あべしッ」となっていただろうが。

ステイルの体が、学生寮のコンクリを砲弾のようにめり込む。

蹴りのせいで隣の部屋にステイルがブチ込まれ、炎剣が爆発するが、土御門の部屋だったため、二人とも気にとめなかった。

「へエ、まだ意識があるのか。ま、骨は何本か逝ったみたいだが」

「ハア…ハア… - - - - あ」

唐突に、ステイルの脳裏に何かが浮かぶ。

インデックスの修道服『歩く教会』は、法王級の防御性能がある。

その結界の力はロンドンの大聖堂に匹敵する。

アレ破壊する為には、伝説上の聖ジョージのドラゴンでも現れない限り不可能だ。

しかし、現に神裂に斬られたインデックスの『歩く教会』は、完膚なきまでに叩き壊されていた。

一体誰が、どうやって？

「……………」

答えなど、目の前ある。

ステイルが答えにたどり着くと同時に、響夜は霊圧を殺気を込めて解放した。

先刻の美琴の比べるべくもない大きさを。

響夜が一步進むだけで、ステイルの全身から嫌な汗が噴き出す。

「…………ツ、世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よー!!」

魔力を全身に通わし、恐怖で弛緩した体を支える。

「…………その名は炎、その役は剣!」

轟！ と炎が酸素を吸い込み、ステイルの修道服の内側から巨大な炎の塊が出てきた。

「顕現せよッ！！我が身を喰らいて力と為せ……！！」

摂氏3000 の炎の巨人。『魔女狩りの王、イノケンティウス』

ルーンを大量に配置することで、超速再生が可能になり、配置されているルーン全てを消さない限り、イノケンティウスが消えることはない。

ステイル「マグヌスという魔術師の集大成。

「ウゼエ」

響夜は右手で、そのイノケンティウスを蠅を払うかのように消し飛ばす。

が、直ぐ様再生が始まる。しかし、響夜はその一瞬を待つつもりはない。

後ろから迫るイノケンティウスを無視し、一撃で決める為に、ス

テイルの胴体の急所以外に左手刀を少々マジにブチ込む――

「何ッ!？」

しかし、目の前にいたであろうステイルの姿が、煙が晴れるように消え。更に奥から、両手に炎剣を構えた姿で現れる。

「灰は灰に――塵は塵に――」

熱を使い、光の屈折を利用して自分の姿を投影したのだ。

「吸血殺しの紅十字――!!!!」

前からは2つの炎剣。後ろからは3000の炎塊。

ドオンッ!!!

学生寮の七階の通路が、爆炎に染まった。

s i d e ス テ イ ル

「ハッ……ハッ……ハッ……フウ」

漸く呼吸が戻ったか……。

「確実に肋骨が2、3本逝ったな」

いや、それよりあの子を回収しないと。故意ではないとはいえ、神裂が斬ったんだ、傷は深いだろう。急がなければ……。

にしてもアレは一体何だ……？

目の前が黒煙に溢れている。

体に触れた手応えは有った。あの状況、右手が2本なければ乗り越えられないはずだ。

あの身体能力、そして何より、魔術を打ち消す右手。

あんなモノが学園都市にいるのか。” 僕ら（必要悪の教会）” もつかつかしてられないな。

煙の向こうに居るであろうインデックスを回収する為に、後ろを向き、階段へ向かおうとすると、

ド・ク・ン

「……やれやれ」

奴は煙の中に立っていた。

「ば……馬鹿な……」

あれをまともに喰らって……服が少し燃えただけだと……！？

「ていうか、ビリビリの時もそうだったように、同時多角攻撃をすれば、俺が負けると何故思っただろうか？」

「そのビリビリとやらは知らないが、普通3000の炎に挟まれたら人間は死ぬと思っただが」

「ま、力を完全に封印したら確かに死ぬな。『鋼皮^{イェロ}』も硬度がなくなるからな」

知らないよ。

「まさか蜃気楼とは、少し驚いた。――今のが、全力か？」

言葉など、出る訳がない。

奴は肩の服の焦げた所を、まるで埃をはたく様に払い。

突き刺すように、指を指した。

「残念だ」

指先に光が集まり、その光が一瞬に僕の視界を埋めつくした。

最後に聞こえたのは、奴の呟きだけだった。

「――――虚閃^{セロ}」

魔女狩りの王（後書き）

ステイルは死んでません。上半身が消し飛んだだけです。

感想待ってます。

『自動書記』（前書き）

話がマジに進まない。

『自動書記』

side 響夜

ステイルに向かって虚閃を撃った為、ステイルの上半身と学生寮の七階の廊下が消し飛んだ。

.....うん、やっちゃった。

目の前に下半身だけになったステイルが直立不動だ。

学生寮もボロボロ。隣のビルもちよい決れている。

「やっぱり虚閃なんか使わなきゃよかったなア」

.....『双天帰盾』

まずはステイルの治療だ。

対象を囲う楕円形の盾を張り、盾の内側を事象（出来事）が起こる前までの状態に戻す。

限定した対象に生じた事象（出来事）を拒絶することで、たとえ失われたものでも元に戻すことが出来る。

とかWikipedia風に解説してたらスタイルの体の修復が終わった。

別に放置で構わないだろ。神裂が回収すんだろっし。学生寮はアレイスターがなんとかやるだろうし。

それよりはインデックスだ。五養蓋である程度治ってんだろ。

その筈だった。

「……………は？」

インデックスの傷は何一つ治ってなどいなかった。

「どういうことだ！？五養蓋で傷の保存も出来てないだ！？」

ならばと思い、双天帰盾をインデックスに使う。

しかし、傷は一向に治る気配がない。

「双天帰盾はステイルには正しく発動した。『事象の拒絶』がおかしい訳じゃねエ」

間違いない。これは世界の修正力だ。

原作の流れに重要な事象が起こるたびに、ナニカが俺に干渉しやがる。

世界の流れを変えない為に。

もし、この仮説が正しくけりゃ俺の鬼道や空間回帰や事象の拒絶では、インデックスを治せない。

仕方ねえ。

「オイ！大丈夫かインデックス！！！」

「だい、じょうぶ。だよ？」

何が大丈夫だ、自分の背中見てから言いやがればカ野郎。

「お前の頭ン中には、傷を治せる魔術ぐらいあんだろ、使い方教

えろー!!」

「……キミじゃ、ダメだよ。……『超能力者』って時点で、魔術は……使えない。そうでなくても……君の、右手………に消されちゃう……」

この街は超能力育成機関。230万人いるが、八割は超能力者だ。

だが、少なくとも二割は超能力者じゃない教師!。

「……じゃあ、超能力者じゃなきゃいいんだな?」

コクン、とインデックスは頷いた。

喋るのもキツそうだな、急いだ方が良さそうだ。

小萌先生には霊圧は無いから、探查神経でさがせない。

しかし、ここは科学力の頂点。その力、存分に使わせてもらおう。

今日、下校寸前に小萌先生が、『何かあつたら何時でも相談してくださいです!』と、力強くメアドを教えてください

あとは携帯のGPS機能を使って小萌先生の現在地を探し当てる。

存分につつたけど、一応数年前の技術らしいが。

インデックスを抱え、瞬歩で小萌先生の家まで、全速力で空を駆ける。

「間に合え……!」

side out

「ここか……、」

それは、フリーターのおっさんが生活してる様な。

死体遺棄をしても、2、3日はバレなさそうな。

そんな木造二階建てボロアパートだった。

「こんな所に見た目小5の小萌先生が生活しているとは……。」

だが、そんな感想を述べている暇はない。

二階の最奥の部屋に、『つくよみこもえ』というひらがなのドアプレートを発見。

ピンポン、ピンポン。

二度鳴らすが、反応がない。

ならば――――16連射ッ!!!

ピンポピンポピンポピンポピンポピンポピンポピンポ
ンピピピンポンポピピンポンポンピピンポンポンピピ
ンポンポンピンポピピンポンポンポンポンポピンポン
ポンポンピンポン!!!!!!

「はいはいーい、今開けますよー?」

何のリアクションも………ない………だと………!?

ドアがガチャンコ、と色々ツツコミたい効果音をたてて開いた。

「あれー?上条ちゃん、新聞屋さんのアルバイト始めたんですか?」

「何処の世界にシスター背負って新聞配達する奴がいる。ちよつと色々千差万別に困ってるんで入りますね先生。はーい逆家庭訪問」

千差万別の使い方を間違えた響夜が部屋に入ろうとするが、小萌先生が慌てて立ち塞がる。

「先生困ります、いきなり部屋に上がられるというのは。いえ、部屋がビールの空き缶が散らばってたり灰皿のタバコが山盛りになって富士山を形成してるとか、そういった事ではなくてですね！」

「先生」

「はいー？」

「……俺が今背中に抱えるモン見て同じギャグが言えるかどうか試してみやがれ」

「ぎゃ、ギャグではない……って、ぎゃあああああ!？」

インデックスの傷を見てあわあ言ってる小萌先生の部屋に入り、まるで知ってたかの様にビールの空き缶を蹴散らし、背中 of 傷が床に触れないように、響夜はインデックスを寝かせた。

「……出血に伴い、血液中にある生命力マナが流出しつつあります」

まるで壊れた人形のように倒れているインデックスは、静かに目を開き、人間としてはあり得ないほど冷静な瞳で、

「……警告、第二章第六節。出血による生命力の流出が一定量を越えたため強制的に『自動書記ヨハネのペン』で覚醒めざめます」

……その元凶は現れた。

月詠小萌（前書き）

アクセス、ユニーク数がとんでもない数字になってました。

有難うございます。

実質余り進んでない15話、どうぞ！

月詠小萌

side 響夜

あのインデックスロボは小萌先生に任せた。どの道俺に出来ることとは何もない。

それよりも確認しなければならない事がある。

「『限定解除』」

抑えていた霊圧の完全解放。自信が敵意に向けた物体が近付くだけで消滅するほどの超絶した霊圧。

これで高次元干渉が可能だ。つまり、

「オイ！駄目神！！聞こえてンだろが！！！！」

『駄目神言わないでください!!』

随分久しぶりの声だな。美少女なんだが、死が付きまとうドジっ子属性なんざ、害悪でしかない。

ドジで殺されちまったら堪ったもんじゃねエ。

『うう、それは今でもすいません……。』

ほオラ、こつやって勝手に人の心読むし。

「ンな事アどオでもイインだよ。オマエなら知ってンだろ、アレは修正力であってンのか？」

『なんで私との会話は一方通行さんの口調なんですか!? 攻撃的だと主張したいんですか!』

地はこれなんだが、此方じゃ被ンだよ。

『まあいいです。貴方の予想通り、世界の修正力がはたらいています。ですが、貴方は干渉されない筈ですよ?』

は? 実際に干渉受けてンだぞ。

『力を抑えない限り、貴方は何物にも縛られないはずですよ』

……つまり限定霊印を押していたせいかな。

『自業自得です』

「よし、カチンときたから今からオマエ犯しに行くわ」

「あばばばばばばばばばばば！？／／／／／／／／」

……… どういう反応だ？まあ冗談だからイイか、つまり限定解除状態なら大丈夫だと。

『はい／＼／＼／＼じゃ、私は仕事中なんで。頑張つて下さい』 ブ
ツツ

高次元干渉を電話扱いか。小萌先生の方も終わつたみたいだな。

さて、次は神裂か。久しぶりに斬月を使うかな？

ぶつちやけ『首輪』は速攻壊したいが、リミットの前に破壊したら何か不具合が生じたら面倒だ。

物語を辿るしかないわけだ。

面倒くせエ。まあ、ステイルはとにかく神裂は、助けてやりたいしな。

s i d e o u t

s i d e 三人称

一晩明けるとインデックスは高熱と頭痛でぶっ倒れた。首輪が原因か、それとも傷口からバイ菌でも入ったか、体力保全の副産物か。

「小萌先生の服のアレ加減はともかく、大丈夫そうだな」

「アレ加減って何ですか！！？」

「幼稚加減かも」

何時の間にか、インデックスも参戦していた。

現状、小萌先生の家泊まらして貰っている。

インデックスから目を離すのは危険と、響夜は判断したからだ。
学生寮が半壊という理由もあるが。

「です。ところで上条ちゃん、結局この子は上条ちゃんの何様なんです？」

「犬畜生様です」

「違いかもだよ！！」

「ああ？人の絶品料理ただで食い逃げしたア、随分凶太い神経した神の子羊だなアオイ」

「絶品料理ですか？」

「そうなんだよ！きょーやが作る料理は魔術として魔道書に載る

べきかもな美味しさなんだよブツ」

「…上条ちゃん、病人の首筋に手刀は厳し過ぎると思うですよ」

インデックスがいらん事を口走る前に気絶させた響夜。

病人だからはしゃぐな、と言わんばかりの見事な一撃だった。

「という訳でわけありのシスターです。統括理事会も把握していますので安心してください」

「……………先生には、上条ちゃんが一体何に巻き込まれてるか分からないです」

けど、とニッコリ顔で

「それが学園都市内で起きた以上、解決するのは私達教師の役目です。子供の責任を取るのが大人の義務です。上条ちゃんが危ない橋を渡っていると知って、黙ってるほど、先生は子供じゃないです」

何の力も無く、何の責任も無く、何の知識も、世界さえも関係無く。

この精神を大半の統括理事会の屑共に見習わせずにはいられない位、ただただ『正しく』。月詠小萌という教師は言い放った。

この人といい、じゃんじゃん口調の教師といい。

これ程先生足り得た教師を、響夜はほかに知らなかった。

疫病神と言われ続けた響夜には、思わず笑みを浮かべてしまう程に。

「先生を巻き込みたくない理由は、先生が標だからですよ。」

「？」

「帰る場所を示す為の標です。貴女がいるから
生徒は真^{オレ}っ直ぐ橋を渡れるんです」

だから響夜も真っ直ぐに伝えた。

必ず帰ると。

「分かってるなら、先生は良いのです」

やはり、小萌は笑っていた。

月詠小萌（後書き）

話が進まん……………

あと、女転生者を入れよっかなと思ってます。

いんじゃない？と思う意見、アホやろ。とかでもイイです。

感想とアンケート、待ってます。

記憶（前書き）

お気に入り400件突破ッ!!

皆様、御愛読ありがとうございます！

では、16話どうぞ!!

記憶

side 三人称

600メートルほど、離れた雑貨ビルの屋上で、ステイルと、魔術師で、聖人である神裂火織はいた。

「禁書目録に同伴していた少年の身元を探りました。……………禁書^{かの}目録^{じょ}は？」

「生きてるよ。おそらくアレがやったんだろっ」

ステイルは少々忌々しげに答えた。

「それで、神裂。アレは一体何だ？」

「それですが、少年の情報は特に集まっていません。少なくとも魔術師や異能者といった類ではない、という事になるでしょうか」

その返答をステイルは鼻で笑った。

「ハッ、何だ？もしかしてアレが単なる高校生とでもいうつもりかい？」

ステイルは口にくわえていた煙草を吐き捨てる。

「…………やめてくれよ。聖人級の身体能力、魔術を打ち消す力、損氏3000の炎に挟まれて、服が少し焦げた程度で済ませる化物が、ただの学生？聞くが神裂、僕はただの高校生に殺されて、しかも助けられたのかい？」

神裂は黙るしかなかった。倒れていたステイルを回収した学生寮は、見る影もなかった。

蹂躪。

しかもおそらく本気ではない。

寧ろ細心の注意を払い、蟻を掴む程の手加減だったろう。

しかも、ステイルは自身の上半身が消失した覚えがある。

だが、実際にステイルはここにいる。

つまりは戻したのだ。

下半身だけのステイルを完全に復元し、服まで直した。

それがただの高校生？

あり得ない。魔術を神の領域まで至らせることが出来た魔術師。魔神でもそんな事が出来るかわからない。

もし響夜が一般的高校生ならば、地球の世界観はかなり違っていただろう。

「情報の……意図的な封鎖かな。しかし、この街で動くとなれば五行機関のアンテナがかかるはずだが」

五行機関とは、詰まる所統括理事会の事だ。しかし、統括理事会ですら響夜の戦力は一切知らされていない。精々幻想殺しだけだ。

知っているのは、学園都市統括理事長アレクスター・クロウリーのみだ。

「敵戦力は未知数、対して此方の増援は無し。難しい展開ですね」

だからこそ勘違いをする。響夜のバックになんらかの組織が存在するのでないか、と。

実際の所、響夜に後ろ楯の組織など存在しないし、必要がない。

地面を本気で殴るだけで、惑星を破壊することができる。

世界を丸ごと敵に回して、剣を一振りするだけで倒せる。

そんな存在に、助力など必要か？

「……………楽しそうだね」

ふと、ルーンの魔術師は600メートル先を見て呟いた。

その言葉で、神裂の表情から感情が消える。

「僕は、何度”アレ”を引き裂き続けられればいいのかな」

「複雑ですか？かつてあの場所にいた、あなたとしては」

ステイルは立ち上がり、其処をあとにした。

「いつもの事だよ」

そう、いつもの様に。

S i d e
響夜

「おっふる ♪ おっふる ♪ おっふる ♪」

「何とかならねエのか？ そのお風呂の魔神を呼び出す儀式」

病人辞めました、と言わんばかりに頭の上にお風呂道具一式を掲げ、俺の周りをぐるぐる廻り、安全ピンで繋がった修道服アイアンメイデンを着てハシヤギ倒していた。

ちなみに小萌先生のアパートには『風呂』などという概念は存在せず、アパート最寄りにある銭湯に行く事となったのだ。

「きょーや、きょーや」

「問い掛けるのはイイが、喰らいつくな。犬畜生から狂犬にクラスチェンジさせんぞコラ。……………何だよ？」

会って数日で、これ程名前を呼ばれるのに違和感を感じさせないのは、最早インデックスのスキルではないか？。

実質、俺は学校のクラスメイトに名前を呼ばれたことがない。正確には、両親である上条夫妻と、従姉妹以外は、基本苗字の『上条』の方で呼ばれている。

この従姉妹とは、本当の妹みたいに接していたら、典型的な『ブラコン』なってしまったが、今や優等生な美少女に成長した。

しかも、俺と違いとても運がイイ。…………泣きたくなるな。

ただ、初めて会ったときの戸惑い様………なんかおかしかったよ
うな……。

話が逸れたが、インデックスは人を惹き付ける何かがあると思う。
十万三千冊の魔道書なんて関係無く、人として。

或は、このせいで悲劇が起きたのでは、と考えもあるだろう。皮
肉過ぎるが。

「ジャパニーズセントーにはコーヒー牛乳があるって、小萌がい
ってた。コーヒー牛乳って何？カプチーノみたいなもの？」

「んな高尚なモンは銭湯にはねエ。つか、オマエントコの風呂に
はカプチーノなんざついてんのか？」

「んー？ ……………その辺は良く分かんないかも」

「何でだよ？」

インデックスは本当に分からないという感じを表現するかの様に小さく首を傾けた。

「私、気がついたら日本こっちにいたからね。向ここの事はちょっと分からないんだよ」

「……ふうん。どうりで日本語ペラペラな訳だ。」

俺は動揺を隠す様に、インデックスの後ろを歩いた。

そっだ、インデックスは……。

「……私、一年前から、記憶がなくなっちゃってるからね」

握っている拳に力が入るのが分かる。

一周期、記憶を消さないと脳に負荷がかかる様に魔術を組んだ。

ローラ「スチュアートがステイルや神裂に対し嘘、をついて隠していた真実。

『首輪』。

十万三千冊の魔道書図書館を守る、最強のセキュリティ。

「クソツたれが…（ボソツ）」

インデックスの人権を守る為だとしても、あの糞女狐をブツた斬りたくなる衝動に襲われる。

「むむ？きよーや、なんか怒ってる？」

「別に怒ってねエよ。……………」

「この感じは……」

「どうしたの？きよーや」

「あア、ちょっと忘れ物したみたいだわ。先行っててくれねエか？」

「うん！分かった！！」

効果音を付けるならテトテトが一番な歩き方で、先にインデックスを行かせる。

「よオ、別に隠れる必要なんかねエぜ。魔術師さん？」

「……………御気遣い、有難うございます。何時から気付いて？」

「スタイルが人払いの魔術を使っただけだ。」

現れたのは一人の女性。大体18、19歳くらいだろう。黒髪ポニーに、Tシャツに片脚だけ大胆に切ったジーンズ。そして腰から拳銃の様にぶら下げた、ニメートル越えの日本刀。

個人的には超タイプ。

刀から発せられる殺気が無ければ。

「アンタ、名前は？俺のは知ってんだろ」

世界に20人の聖人の一人――

「神裂火織。と申します」

- 魔術師、神裂火織。

記憶（後書き）

作者が個人的に大好きな神裂ねーちゃん登・場！！

アンケートの中間報告はドッコイドッコイです。

アンケートや感想、お待ちしております。

神裂火織（前書き）

なんだか、無理やり感が……。

黒い野良猫さん本当に申し訳ありません。

神裂火織

side 三人称

学園都市の片側三車線の大通り。

人払いの魔術により、人は消え、その中心で、二人は対峙していた。

「一つ、伺いたい事が、あるのですが。何故私たちだと？」

響夜は、人払いの魔術が発動した瞬間、ソレに気付いた。少し気になったのだろう。

「別に、大したことじゃねエ。普通こんな大通りに人一人いないがおかしいのは大前提としても、それくらいなら超能力でも出来る」

「だが、超能力者だとしてもインデックスまで巻き込む理由がない。現時点、俺を巻き込む理由があり、外部の人間であるインデックスを標的にする可能性があるのは、アンタ等だけだ」

「……………出来ればもう一つの名は名乗りたくないのですが…」

魔術師としての名……………魔法名。

「率直に言って……………魔法名を名乗る前に彼女を保護したいのですが」

渡してくれ、と、神裂は普通なら悪寒が走る雰囲気醸し出している。

まるで、戦いたくないと言わんばかりに。

「……………」

対して響夜は無言だった。何かを考える様に。

「随分優しいんだな。ステイルなんかは即魔法名名乗って炎剣ブツ放してきたのによ。そして答えはノーだ。」

「……………仕方ありません」

そう言っって神裂きは目を閉じて、

「名乗ってから、彼女を保護するまで」

ドンツ！！と、爆弾でも爆発したような音を立て、何百メートル先が炎に包まれていた。

やったのは誰か？決まっている。炎というならスタイルだ。

響夜は目だけ動かして確認した。

しかし、神裂はその一瞬を見逃さなかった。

斬撃―――なのだが、そのリーチがおかしかった。

神裂の刀は確かに長いが、響夜との距離は軽く10メートルはある。

しかし、響夜の頭スレスレの空気が裂かれた。

その不可視の斬撃が、斜め右後ろにある風力発電のプロペラを綺麗に切断していたのだ。

「いくらステイルを倒したからといって、舐めないで下さい」

閉じていた目を開いて、

「もう一度問います、魔法名を名乗る前に彼女を保護したいのですが――ッ!？」

神裂は見た。

響夜が引き裂く様な笑みを浮かべたのを。

それと共に響夜から莫大な圧力が神裂を襲った。

「ッ!………何度でも問います……!」

瞬、と、ほんの一瞬だけ、ゲームのバグのように神裂の右手がブ
レて、消える。

轟ッ！という風の唸りと共に、恐るべき速度で何かが襲いかかってきた。

だが、響夜は神裂の予測の斜め上をブチ抜いていた。

「――！！？」

「なる程、ワイヤーコイツが斬撃の正体か。どうやらアンタは俺の幻想殺しとは相性抜群な訳だ」

響夜はその斬撃を素手で掴み取ったのだ。

何の躊躇も無く。しかも響夜の手は傷一つない

それは七本の鋼糸だった。

七閃。

神裂の刀――七天七刀を抜く動作をダミーにし、七本のワイヤーを駆使し、見えない斬撃に変えていたのだ。

「まあ、アンタにも色々あんだろうが、インデックスを狙うなら俺もアンタみたいに言いたい事があるんだよ」

響夜はまるで背中に担いでる剣を抜く様な動作で、

虚空から、大きな刀を掴み出してしていた。

・
・
・
・
・
・

「なッ……!？」

神裂が驚くのは、これで何回目だろうか。

いつの間にか響夜の手には出刃包丁のような大刀が握られていたのだ。

激しいつばぜり合いも、限界だった。

「オマエの方こそ、こんだけ力がありながら何故動かないッ！
ギャンッ！！」

「ど……どついう事ですか！？」

「知ってるぜ……インデックスは脳に何かしらの異常をきたして
いる」

「……！！」

「そして………」

動揺により神裂に生まれた隙に、拳を叩き込み、即座に距離を取る。

「ぐあッ！！」

「アンタはその原因を知っている………月牙天衝
！！」

間髪入れず、月牙天衝を放った。

「クッ……」

対して神裂は、鋼糸を利用して結界を作るが、月牙天衝は、易々と結界を叩き割る。

しかし、神裂には当たらなかった。

いや、当てなかった。おかげで大通りに大きな溝？が出来たが。

神裂の肩が震えていたからだ。

ダメージや消耗だけではない、精神的な疲労を。

響夜は、霊圧を押さえた。神裂と話をする為に。

「話せよ神裂。インデックスが抱えてる、アンタ達が抱えてる幻もんだい

想を」

「……………」

少しの沈黙の後。神裂は、絞り出すようにその言葉を紡いだ。

「……わ……私の所属は、あの子と同じ『必要悪の教会……………』」
ネセサリウス

自然と響夜は目を細めるのを自覚しながら、

「あの子は、私の同僚にして大切な……………」

神裂の言葉を受け止めた。

「……………親友、なのですよ」

神裂火織（後書き）

アンケートと感想、受付けてます。

完全記憶能力（前書き）

すいません。自分の文才の無さに、すいません。

完全記憶能力

side 三人称

「完全記憶能力、という言葉に聞き覚えはありませんか？」

聞き覚えがないはずはない。響夜も『完全^{ソレ}記憶能力』なのだから。

「10万3000冊を記憶してられる能力………だろ」

神裂の声は、ロンドンでも十指に入る魔術師ではなかった。

響夜には、それは、弱々しく、痛々しく、疲れきっていた、ただの女の子の様に見えた。

「あなたには、彼女がどう見えます？」

「ただの無力な女^{ガキ}の子だ」

今のオマエみたいにな、と続けなかったが、即答だった。

実際、インデックスに対して響夜が受けた印象は、それに尽きた。

記憶が無いことに怯えながら、その事を欠片も響夜に言わず。

記憶の中にある『十万三千冊^モ』のせいで、己に課せられた運命（役割）に人生を振り回され――。

「ただの女の子が、一年間も私達の追撃から逃れ続ける事ができ
ると思いますか？」

「……………」

「ステイルの炎に、私の七閃と唯閃――――私達のような
魔術師達相手に、ただの自分――人間の手足だけで逃げる事が」

問う、必要などあるか？しかし、彼女は逃げ続けられる。

「アレは、紛れもなく天才です。扱いさえ間違えれば天災となり
うるレベルの。」

黙り続けていた響夜の眼に怒気が宿る、例え知っていたとしても、

「怖いんですよ、教会は、誰も^{うえ}が」

宿らずには、いられない。

「チツ……。それで？それと記憶がないのどう関係がある。
完全記憶能力はどうした？」

「消しました。この手で」

「……………何故」

「そうしなければ、彼女が死んでしまうからです」

「……………」

「……彼女のスペックは先ほど述べた通り、ただの人間のそれです。そして十万三千冊は彼女の脳の容量の85%が、魔道書の記録で埋め尽くされてしまったんですよ。ですが、結果として彼女のだから彼女は残りの15%しか脳を使えない」

「……………」

「しかし完全記憶能力を持つ彼女は、たった一年間で、15%を埋め尽くしてしまう」

「……………」

「だから彼女は1年ごとに記憶を消さなければ、脳がパンクして死んでしまう」

「だから消しましたってか、記憶を」

「バカげてやがる」

しかし響夜は、一方通行が言いそうな言葉を口にした。

「……バカげてる？何がバカげているのですか？」

神裂は明らかにキレた。当たり前だ。自らの行為を全否定されたのだから。

だが、響夜もキレていた。

聞いた言葉をそのまま信じ、満足に調べもせずインデックスの記憶を奪ったその迂闊さに。

「確かにオマエ等は努力したんだろうな、考えたんだろうよ。インデックスの記憶を奪わなくて良い方法を。魔術的に！！！！」

だから響夜は吠える。

「記憶の85%を占めている？残り15%では一年間が限界？答えが間違っていると考えたんだ事はあるか？それは医者が言ったのか？それは自分で調べて至った答えか！？」

「そつ……それは……」

「答える神裂、それは誰が言ったのか」

圧された。神裂は、響夜の眼に。自分の中に生まれた疑心に。

「あ、^{アークビショップ}最大主教です。『^{ネセサリウス}必要悪の教会』のトップの………」

「ソイツは脳医学の知識はあるか？」

「……………え？」

予想外。まさにその言葉が一番、神裂の顔を表現するのにピッタリだった。

完全記憶能力（後書き）

ハハハ、時間かけて試行錯誤した結果がこれだよ（泣）

一応、転生者はなしで行きます。オリキャラは入れますが。

和解（前書き）

短め。

訂正部分を直したのに、コンピューターじゃ、直ってない。

お気に入り数が500越えッ!!? ?

和解

side 響夜

「まずは勘違いを解いておこう」

今、俺は神裂と電話している。

流石にあのまま長話するのは流石に不味かったからだ。

ただでさえ七閃で風車のプロペラ切断でも風紀委員が飛んできてもおかしくないのに、だめ押しと言わんばかりの月牙天衝。

アンチスキルが完全武装でやって来そうな惨状なので、ステイルが人払いのルーンを使っている間においとまのだ。

その時に神裂とアドレス交換などをし、インデックスと合流。何事も無かったように小萌宅に帰り、今に至るといった運びだ。

ステイルの炎？あの後風呂屋行ったら、インデックス普通にコーヒー牛乳のんでたが？

取り敢えず本題に移ろう。

「インデックスの問題は、記憶容量が原因の脳のパンクじゃない」

「なッ……………！！！」

愕然とした声が携帯を通して聞こえる。

当然だろう。死に物狂いで解決を図った問題が、たった一言で蹴されたのだから。

「本来的、記憶というものは様々な分野に分けられている。感覚記憶を代表に、短期記憶（STM）、作動記憶（working memory）、長期記憶（LTM）陳述記憶、非陳述記憶、自伝的記憶、展望的記憶と様々なな。記憶喪失に陥った人間は、全員新生児からやり直してるか？」

答えは当然否だ。

「つまり何千万冊本を暗記しても、生命活動に何ら影響は生じない」

人間舐めんな、と、未だ動揺を隠せなさそうな（電話越しだから分からん）神裂に言い放つ。

そして同時に、新たな問題が浮上してくる。

「しかし現に、インデックスは苦しんでるんだろ？なら、他に原因があるはずだ。例えば――――」

「教会側があの子に何かした………という訳ですか………ッ！」

ギリツ、と歯を噛みしめる音が聞こえる。

教会側の、アークヒショッフ最大主教の嘘を信じ、自分達との思い出を、自分達の手で消したのだ。

掌で踊らされた。

これ程悔しい事は無いだろう。そして、インデックスは苦しみ続けている。

「神裂、インデックスに残された時間は？」

「残り三日です」

「だったら、三日後に来い。それまでにある程度調べておく」

「分かりました……………」

「…どうした？」

「いえ……。なんというか、自分があまりにも情けなくて……。あなたの言う通り、確かにバカけてますね」

愚かだったと、自傷気味に呟く。

神裂は何かと一人で背負い込む。

聖人は、何かと運がいい。宝くじを引けば、必ず当たりを引く。ということは、他人を必ずハズレを引かすことになる。

つまり自分せいでハズレくじを引いた人が出てきてしまう、と。

天草十字凄教の際も、自分を攻め続けた。

抱え込み過ぎ、背負い込み過ぎなのだ。聖人という力と立場が無ければ、18歳の女の子だというのに。

「神裂。オマエ、この件が片付いたら遊びに来い」

「へっ？」

「スケジュールとか厳しそうだから、1日だけでいい。カラオケやらゲームセンターやら遊園地とかどうだ？勿論、インデックスも一緒だ」

「……………」

「魔術師の立場なんて忘れて、パーツと はしゃぐつぜ」

神裂にだって、そういう日が有っても良いじゃねエか。

「……………ッ／＼、はい、必ず!」

聞こえねエよ。

涙ぐんでる、声なんて。

和解（後書き）

次回は原作一巻のラスボス戦！！！！

倒すまで行けるかなあ……………？

『首輪』、そして激突

side 三人称

「……ということだ、分かったかインデックス？」

「いきなりすぎて皆おいてけぼりなんだよ、きょーや。」

そんなこんなで、ある程度ショートカットしたが、響夜は事情をインデックスに話した。

自分を追っていた魔術師が自分と同じ『必要悪の教会』ネセサリウスであること。

そして、二人が自分を助ける為に二人との思い出を消した親友である事。

そして、教会が自分に仕掛けた『首輪』の事を。

普通ならそんな話、信じられる筈がない。

それ以上に、受け入れられる筈がない。

その余りにも過酷な運命を、直視出来る筈がない。

だが、目の前の少女は、見るだけで発狂するほどの魔道書^{どく}を10万三千もの数を受け入れていられる器を持ち、そして、

「……………辛くはないのか？」

「うん……………、私一人じゃ耐えきれなかったかもだよ。でも、」

「でも？」

「それを響夜が私に言っ たって事は、響夜が助けしてくれるんだよ

ね？」

禁書目録かのじょは希望を、持っているのだから。

「……………ハッ、当たり前だ。俺を誰だと思ってやがる？」

目の前に、自らが進むべき方向を示す標があるのだから。

彼女は、笑って暗闇を突き進める。一筋の光が出口を示してくれる限り。

「まずは、オマエの脳を圧迫する魔術を破壊する。だか、問題はそこからだ」

「うん。でもそれって何処にあるのかな？私が普段気付かなかつた位だから私には見えない場所だね……………」

むう、と、彼女には珍しく頭を抱える。

「考えられる場所は、幾つかある」

「何処かわかってるの!？」

「あア、おそらく脳に近い場所で喉の奥か……………」

「『ピーー』
『だろっな』」

瞬間、世界が凍った。

無論、インデックスは湯気が出るんじゃないかと思う程、顔を赤くした。

響夜は冗談で言った為、何の変化もない。つか内心爆笑している。

「き、きききき響夜？そそ、それはどうやって破壊するのかな？
／／／／／／／／」

「右手で触れて」

その時、インデックスの脳裏に凄まじい妄想が走ったッ！！！！！

ボンッ。

インデックスは、そこで意識を失ったW。

「ステイル、神裂。カモーン」

すると、あらかじめ待っていたステイルと神裂がドアから入ってくる。

響夜は初めから喉の奥に首輪の術式があることを確認済みだったのだ。だが、意識がある時に指を喉に突っ込むのは気が引けた為、

『じゃ、取り敢えず説明終わったらインデックスの意識を落とすから、その後入ってこい。』

ステイルと神裂には、どうやってインデックスの意識を落とすか言わなかったが。勿論、家の外に待機していたからどうやったかは、ステイルは分からなかった。

「さて、いよいよか……………神裂？顔が赤いけど、大丈夫かい」

「い、いえっ、何でもありませんよスタイル／＼／＼／」

ま、聖人としての聴覚を持つ神裂には聞こえたため、インデックスと同じ妄想をしたのだが。

「神裂、お主も初よのう（。・・）」

「あっ、貴方はッ……………！！／／／／」

確信犯である。

その後、響夜が神裂を弄りまくったのは割愛。

「さて、見えるか？二人共」

響夜はインデックスの口を開き、神裂達にも、『首輪』のルーンを見せる。

「これは……………！」

「くっ……………こんなもののせいで……………！！！」

「見たな、破壊するから離れてろ。そして戦闘の準備をしておけ、相手はオマエ等の言う魔神だ」

そして、パチン、と静電気が散る様な感触を響夜が感じた瞬間、

バキンッ！

響夜は直ぐインデックスから離れ、神裂達の場所に飛び退く。

「…………警告、第三章第二節。Index-Librorum
- Prohibitorium - ……インデックス禁書目録の『首輪』”第一
から第三まで全結界の貫通を確認。再生準備…………失敗。現状、十
万三千冊の『書庫』の保護のため、侵入者の迎撃を優先します」

無機質で無表情なインデックスは機械的な言葉と共に降臨した。

その無表情な目に、魔方陣を宿して。

「……………限定解除」

ドンッ！！！！

響夜の体が、黒い霊圧が響夜を包み、一閃。

霧を晴らす様に、中から黒いロングコートに身に纏った響夜が出てきた。

「……………卍解、天鎖斬月」

圧倒的に、絶対的な意味を持つ一振りの黒刀を右手と融合させて、あらゆる縛りを解放させて、

「一回言いたかったから言わせてもらうが……………」

「……………侵入者個人に対し最も有効な魔術の組み込みに成功しました。これより特定魔術『^{セント}聖ジョージの聖域』を発動、侵入者を破壊します」

死神は魔神に自身と一体化した刀を突き付け、

「禁書目録！魔術^{ちしき}の貯蔵は充分かッ！！！」

魔神と死神は、激突した。

『首輪』、そして激突（後書き）

アンケートしていましたが、余りにも猛抗議の為。アンケートを受付を中止しました。

決着（前書き）

長め。前話での記憶飛ばすか飛ばさないかアンケートは、あつつつつつ倒的な飛ばさない票によって飛ばさない方向性でいきます。

決着

side 三人称

響夜がインデックスに刃を向けたと同時に、それに呼応するかのよう
にインデックスが魔法陣を展開された。

魔法陣の上に重なるように、真っ黒な罫のようにそれは空間を直接
刻み込んだ亀裂きれつのようなものが二つの魔法陣の接点を中心に、世界
に真っ黒な亀裂が走り抜けていく。

そして、魔法陣の奥から『ナニカ』を、響夜が観た瞬間――

レーザーの様な一筋の光の柱が、響夜に襲い掛かった。

――
――
――
――
――
――
――
――
『ドラゴンブレス 竜王の殺息』。

それは、かの聖^{セント}ジョージの伝説に登場するドラゴンが繰り出した攻撃と同義のもの。

おそらく幻想殺しでさえ、真正面から押し負けてしまう程の圧倒的な破壊力をもった光が響夜を襲ったのだ。

だが、今異能を打ち消す右手は存在せず、あるのは異能を斬り裂くことのできる力を持つ刀。

そしてその刀にとって、異能を打ち消す力などイントロにすらならない。

まるで風が吹いている中、その刀身を立てているだけの挙動で、『竜王の殺息』を受け止める。

ギギギギギギギギギッ!!!!!!!!!!!!!!

それは攻撃した筈の『竜王の殺息』が、悲鳴を挙げている様だったが、

「こんなモンかよ」

そう、残念そうに呟いた響夜は、刀を一振りしただけで『竜王の殺息』を斬り裂いた。

斬り裂かれた『竜王の殺息』は霧散し、消えていった。

「馬鹿な……………『竜王の殺息』を一撃で…！？」

魔神の一撃を軽くあしらった。

今更ながら、ステイルと神裂は響夜という存在が、どれ程の領域に

立っているか理解できた。

いや、正確には理解出来ない事が、理解出来た。

「——『^{セイント}聖ジョージの聖域』は侵入者に対して効果が見られません。他の術式へ切り替え、引き続き『首輪』保護のため侵入者の破壊を継続します」

「出来んならなア……！」

再び何かしらの大魔術を放とうとしたインデックスの魔方陣を、まるで薄氷を叩き割るように天鎖斬月で斬る。

振るった剣圧だけでインデックスの体と屋根が吹き飛ぶ。それに対して、吹き飛ばされる事を利用し、インデックスの背から赤い翼を生やし、一瞬で急上昇するが。

その赤い翼が一瞬で斬り落とされる。

「チッ」

しかし、斬り落とした張本人の口から出たのは舌打ちだった。

斬り落とした赤い翼が瞬時に生え直されたからだ。

響夜は攻めあぐねていた。確かに響夜ならばインデックスを簡単に殺せるが、首輪だけを破壊するのは骨が折れる。インデックスを救う為にインデックスを殺してしまったては本末転倒である。

だが相手も正解もせず、簡単に破壊させてもくれないだろう。

だが破壊する方法が無い訳ではない。だが時間が無い。だったら――
――。
――。

「警告、第三五章第十八節。『硫黄の雨は大地を焼く』――
完全発動まで五秒」

オレンジ色に灼熱する、矢のような物が降り注いだ。

合計約五十近い矢が、響夜を狙う。

「破道の八十八、飛竜撃賊震天雷砲

（ひりゅうげきぞくしんてんらいほう）」

ゴッ！！！！

響夜の掌から、極大の雷撃が放たれ、『硫黄の雨は大地を焼く』を
全て消し飛ばした。

響夜が雷撃を放ったと同時に……………、

「警告、第二二章第一節。命名。『神よ、何故私を見捨てたのです
か』。……………完全発動まで七秒」

「明らかに七秒じゃねエよなソレ！！！」

インデックスの前方に、再び魔法陣が現れ、血の様な閃光が飛び出した。

「縛道の八十一、断空」

響夜はソレを先ほどの様に刀で受け止めるのではなく、縛道で受け止めた。

勿論意味はある。

「縛道六十一、六条光牢」

ガギン！と、光の板がインデックスを拘束する。勿論インデックスも黙っておらず、対応しようとするが、そんな事を響夜がさせる訳もなく。

「縛道の六十三、鎖条鎖縛！」

太い鎖が蛇のように巻きつき、インデックスの次手を奪った。

だが、まだ足りない。

そう言わんばかりに、響夜は更に次の手を使う。

「縛道の七十九、九曜縛くよつしほり！！」

インデックスの周り縦方向に八つ、胸に一つの黒い鬼道の玉のようなものを出し、インデックスを更に縛る。

翼を縛られたインデックスは、屋根がブチ抜かれた小萌宅に落下していく。

インデックスを追い、響夜もステイル達の下に降りる。

これで暫くインデックスは動けない。そう判断した響夜は切り札を切る。

その一瞬をインデックスは待っていた。

「!!!？」

どうやったか分からないが、無理矢理あの何重もの拘束を一瞬で破ったのだ。

完全に油断していた響夜の死角から巨大な光の剣が襲う。

「マズッ……………」

「Salvare 000（救われぬ者に救いの手を）！！！」

神裂の七閃で響夜の足場の畳を動かし、響夜を光の剣から逃がしたのだ。

「神裂……………」

「気を付けて下さい」

「……警告、第六章第十三節。新たな敵兵を確認。戦闘思考を変更、戦場の検索を開始……………完了。現状、最も難易度の高い敵兵『上条響夜』の破壊を最優先します」

『竜王の殺息』が殺到。

だが響夜を守る様に、イノケンティウスが前に現れ、破壊と再生を続け、ぶつかり合う。

「どうしたんだい？随分油断していたじゃないか」

二人は、言葉を使わずに告げる

――自分達にもやらせる。

「ハッ………上等じゃねエか。ステイルツ！時間を稼げ！！終わらせる！！！」

「あのこ十万三千冊相手に時間を稼げか！無茶を言っな君は……！！！」

『竜の息吹き』をイノケンティウスで止めているステイルに、赤い翼が襲うが、

「私を忘れないで下さい!!」

『唯閃』――十字教の天使すら斬る神裂の一撃が、翼を切断して危機を回避する。

「くっ、まだか!? 上条響――」

ゴウッ!!!!!!

ステイルの後ろで、蒼黒い霊圧が立ち上る。

中から出てきたのは、オレンジだった髪は、黒髪の長髪、口から上半身にかけて青灰色の包帯を纏った姿に、瞳の色も真紅に変わり、右腕から黒い霊圧を起ち昇らせている響夜だった。

「……待ったか？」

「……ええ！大遅刻ですよ／＼／＼！！」

「そいつは悪かったな。……ステイル！イノケンティウスから離れて解除しろ！！限界だろ！！」

「

「ハッ、そうさせてもらうよ、魔力がすっからかんだ。」

イノケンティウスを解除し、防いでいた『神よ、何故私を見捨てたのですか』が響夜に向かう。

響夜は、迫り来る血の閃光など見ず、再び上空に飛翔していたイン

デックスの首輪……魔方阵の奥のナニカを、直視した。

右手を何も無い空間に向けて、一筋の黒線を掴み、振り上げ……

「（世界よオ、テメエが抑止力とか宇宙の法則なんざで俺を縛れん
だと思ってんなら……」

「（……まずは、その幻想をブツた斬る……!）」

……その刃を降り下ろした。

- - - - -『無月』

瞬間、世界に音と色が消えた。

周囲を覆う程の漆黒の斬撃を発現させ、『斬撃^{きょうや}』は 空中に飛んでいたインデックスの首輪を真つ二つに破壊し、そのまま『ツリーダイヤグラム』のメインシステムまで切り落とした。

目標が、地面に向かっていれば、地球は2つになっていただろう。

暫くして、色と音が世界に戻り、いつの間にかインデックスを響夜

が抱えていた。

「――警、こく。最終……章。第、零――」
『首輪、』致命的な、破壊……再生、不可……消」

ブツン、とインデックスの口から全ての声が消え、魔法陣も消失した。

この夜。多くの悲劇と犠牲を作り続けていた『げんきよう首輪』は破壊され――
――、

決着（後書き）

次の更新は遅れます。申し訳ありません。

「**つのエピソード、そして物語は始まる（前書き）**」

インデックス編、第一巻のまとめです。

ちょっとしたカミングアウトもありますが。

「つのエピソード、そして物語は始まる

「スゴイね君の体、二日目で点滴の針が刺さらないなんて。君、本当に人間かい？」

「え、多分人間の筈ですよ。腕とか生えるけど（ボソッ）」

あの戦いの後、響夜は無月の副作用の激痛と昏倒に襲われ入院した。

勿論、次の日、「復活^{リッポーン}!!!」つつてもおかしくない程の快調で目覚めた。

注射器……、おそらく
響夜は、ユーラシア大陸をも切断可能のアイズブレードでも傷ひとつつかないだろう。

「解剖でもしてみるか？冥土返し（ヘブンキャンセラー）？」

「……………！！。…フツ、止めておくよ、多分メスが入らない。それに君は僕の患者なんだ。患者を解剖する医者がいるかい？」

「そうでしょうね。そんな事をすれば、ナースが存在しない病棟に移されそうですしねエ」

「ぬああああああ！！！！」

響夜は、ナースフェチなカエル顔の医者 of 慟哭を聞いた。

今日もクソ暑いのに、風が気持ちいい。

インデックスを救った。

一言で言い終えるのは簡単だ。

でも本当にこれでよかったのだろうか？

これで本当に正しかったのだろうか？

そもそも、上条当麻ではない俺に”インデックスを救った”などと言う権利などないはずだ。

俺は上条当麻という存在を踏み倒して、押し退けて。貰い物の力で粹がっているだけの、ただ屑ではないか？

それを主人公気取りで。

神裂にバカげているといったが、そんな事をほざける資格なんて無いはずだ。

インデックスを助けるなら、もっと早くにできていた筈だ。

それを原作を崩さない為、などという利己的な理由でインデックス達を弄んだのではないか？

そしてそれは続くだろう。

こんな事ならば、いつそ記憶を失った方が楽だったかもな。

そんな”逃げ”に走ろうとまで考えてしまう。

「…………アホか俺は」

逃げてなんになる、これは俺の罪だ。

人間が生まれつき刻まれている『源罪』の様なものだ。

そして、俺はインデックスを助けた。過去の事をウジウジ悩んでは前に進めない。

ならば責任を取るべきだろう。

これから俺は、俺の我が儘を貫く。

どんなクソツタレなプロローグでも、ハッピーエンドにして見せる。

「いつか、この我が儘を信念にしてみせる」

病室の扉を開く音がする、彼女が来たのだろう。

だったら尚更ウジウジしてられない。

「きょうやー!」

途中で曇らす事があっても、大団円には守って見せる。

この、何処までも明るい笑顔を――。

「よう、どうしたよ。インデックス」

『よかったですね』

ソレは、嬉しそうに、いとおしそうに。

彼女は『観ていた』。

響夜が、インデックスの笑顔を守ろうとするように。

彼女は響夜の笑顔を守りたかった。

響夜から駄目神と呼ばれた彼女は呟いた。

「貴方だけは、幸せにしてみますよ」

兄さん

第二章、吸血殺し 始まるの？（前書き）

お気に入り800件突破！！

アクセス数三十万突破！！

皆さん！こんな駄文を読んでくれて有難うございます！！

第二章、吸血殺し 始まるの？

side 響夜

「……………暑ッッじいじいじい」

今日は八月八日。分かると思うが、日向は流刃若火の炎熱地獄だ。

何なんだ、この暑さは。

俺はただ夏休みの宿題を処理するための資料を調べ、家に帰る。

ただソレだけの行為が、何故これ程苦痛が伴うのか？

アレイスターよオ、『アンダーライン滞空回線』に冷房機能付けようや。

学園都市は変わるぜ。

てか付ける。さもないと、お前の根城に大量の蠅を投入するぞコラ。

表示画面が見れなくなる程の蠅を投入して、更に大量の烏をブチ込むぞオラ。

「きょうや、殺人犯の眼になってるよ」

「仕方無い。世界の、学園都市全校生徒の救いなんだよ」

さもなくば俺が理不尽に、不合理に、不条理にブチ切れる。窓の無いビルを細切れにしたくなる衝動に襲われるんだよ。

完全虚化しそうだ。

「そんな事よりきょうや、アイス食べようよ」

「なんの遠慮もなく口にしゃがったよ、このシスター」

俺は、隣を歩いている、家に置いておくと家の食料全てを喰らう危険性を帯びた少女。インデックスに突っ込んだ。

原作では、こんな単刀直入でぶつちやけてたか？

もちっとオブラートに包めや。幾らでも方法はあるだろうが。

「しっかしなあ…………、お前をそんな場所に立たせれば諭吉が二桁飛ぶ。」

「ムウ、私はそんな食いしん坊じゃないんだよ。一応私も神に遣える身なんだから大丈夫なんだよ」

どの口でほざいてんだ。本当便利だよな、一応^{それ}。

この暴食に自制が出来る^{インデックス}とも思えん

……破産覚悟か捕食されるか。

そんなある意味、世界最大の難問にブチ当たった時、

「なかなか素敵な交渉中なんやけどもな、ちなみにその子誰なん力ミやん？」

そこに、エセ関西弁を司る変態^{アホ}がいた。

「……………（、エ、）」

「なんか、えらい世にも珍しい表情してるにゃー、カミヤん」

変態（アホ2号）も現れよった。

これは世界の終わりか何かか？フィアンマさんや、出番ですよ。

……説明しようッ！この二人、片方の名は土御門元春。
シスコンであり、妹に手を出したという噂すら出ている、にゃーに
ゃーグラサン金髪野郎なのだッ！！！！

まあ、シスコンを除けばイイ奴なんだが……。

更に片方は青髪ピアスッ！名前は知らん！！作者の都合だ！！！！

こやつはロリコン、変態、M男と、異常癖三種の神器を持つ危険人

物だ！！（ファンの人すいません！）

お子様は無闇に近付いたら危険だ！！（ファンの人マジすいません！！）

「犬畜生だ」

「きょうや！前小萌の時も同じ言動だったと思うかもだよ！！」

「おまッ……！？カミちゃん！！なんと羨ましいプレイをしとるんや！！！！」

「プレイじゃねエよ。オマエもちよつとは自分の欲望を誤魔化せ」

吹寄ー、助けてくれー。

「謝罪としてアイスを食べさせてほしいんだよ！！」

「歪曲もいいところだ！！」

十万三千冊に歪曲の魔眼まで持っているとは！！

インデックス…………、恐ろしい子ッ（（（（；。D（（（

つか最初からソレが狙いだったよな！

「まあまあ、カミヤん。ええやないのアイスくらい」

バックヤロウ！！このブラックホールシスター嘗めてんじゃねえ
！！！！

ムッ！……………待てよ…………。

「そこまで言うんなら、お前が奢れよ青ピィ」

「それただの青ピーナッツみたいやから止めてッ！！構いません
よー！こんな美少女とお茶できるんやったら本望ですよー」

「いや、青ピーナッツなんて無さそうだにゃー」

……青ピィアス。残念ながら、インデックスとの食事はお茶なん

て平和なモンじゃねエよ。あれは――――、

――――狩り場だ。

ま、取り敢えずアイスクリーム屋は店舗改装の為に休業だった為、
..... 為ばつか使ってんな。

兎に角、マツ●シェイクで妥協。冷房効いてるだろ、と思い入って
みると満員状態。記憶通り。

そのせいか、インデックスの暴食がヒートアップ。青ピの財布はた
だの皮に成り果てたのは計算外だw。

「……………きょうや、私は是が非でも一休みしたいんだよ」

「二時間突っ立ってたらマツク・エイク一本追加」

又グウウウ……ッ！と、インデックスが唸っていたが、流石は聖職者。

七つの大罪の一つを一時的に克服したのか、座席を所望してきたが。

「はあ、それなら相席していただくしか方法はありませんね」

一級品の営業スマイリーな判決が下った。

残酷な●使のテーゼがBGMで流れていたのは幻聴だろう。

店員さんが指さした席には、

そこのテーブルには、

巫女さんがテーブルに突っ伏して熟睡中だった。

サラサラの長い黒髪がクラゲのように拡大し、その巫女さんの顔を覆っていた。

.....マジで居たよ。

しかも既にインデックスがフェイドイン。

巫女&シスター、中々にシユールだ。なあ、そう思わないか？

復活し、そこで眼を輝かせている青ピよ。

そして、恐々となりながらも、近付いたら俺が聞いた第一声が、

「.....食い倒れた」

「ガシしろ」

反射的に言った言葉は、酷いと思うがスルーしてくれ。

吸血鬼殺し編、始まるのか？

第二章、吸血殺し 始まるの？（後書き）

次回！！窓の無いビルに大量の蠅が！！

これが『プラン』にどのような影響を与えるのか？

世界は、生徒達は救われるのか！？

蠅は烏で駆除出来るのか！？

アレキスターはどうするのか！？

まあ、嘘予告だけど。

シリアスブレイカー（笑）（前書き）

吸血殺しの説明が無いッ！！！！

シリ阿斯ブレイカー（笑）

side 三人称

その部屋には、そのビルには、その建物には窓がない。

ドアがなく、

階段がなく、

通気孔すらない。

エレベーターや通路がなければ建物としての機能が全くない。

そのビルに入る方法と言ったら、大能力者（レベル4）のテレポーターの手を借りるしかない（一人を除き）。

破壊するにも、核ミサイルをブチ込んでも傷一つ付かないだろう（一人を除き）。

科学的に、物理的に、理論的に最高硬度の要塞を、皆は窓の無いビ

ルと呼んでいた。

そんな演算型・衝撃拡散性複合素材でできたビルの中に、一人の魔術師は立っていた。

名前はステイル・マグヌス。

弱冠十四歳で、どこぞの『破綻した正義の味方』のように魔術師を殺す魔術を極めた魔術師だ。

ただ一人の少女為に。

本来、彼は学園都市に在るべき人間ではない。

ただでさえ部外者が入れない学園都市に、魔術師はいられるはずがない。

そんな魔術師がいるのは勿論理由が有り、そのビルに存在している『人間』に会いにきたのだ。

部屋の大量の機械の中心にある容器で、緑色の手術衣を着て逆さに浮かんでいる『人間』に。

男にも女にも、

子供にも大人にも、

囚人にも聖人にも見え、

『人間』としてあらゆる可能性手に入れ、『人間』としてあらゆる可能性を捨てた、

『人間』としか表記出来ない人間。

それが”今”のアレイスター＝クロウリー。

「ここに呼び出した理由はすでに分かっていると思うが……」

学園都市統括理事長、アレイスターは告げた。

「……まずい事になった」

『……笑ってんじゃねエよ（△、）』

”彼”がいたらそう答えただろう声色で。

しかしステイルは彼を知ってはいるが、彼ではない。

「吸血殺し（ディープブラッド）、ですね」

故に、目の前の『人間』に恐怖し、戦慄する。

アレが自分に敵意を覚えた瞬間、八つ裂きにされると分かる。

ここは魔術師である自分にとって敵の本拠地。

230万の『超能力』を統べる場所。

話を戻そう。

――『吸血殺し（ディープブラッド）』。

それは学園都市が保有している原石の一つの能力名だ。

とある吸血鬼^{イクモ}を殺すためのだけのチカラ。

「ふむ」

そんなステイルを眺め、

「能力者だけなら問題はない。あれは私が保有する超能力者の」――

つ”だ」

科学側が関わった所で、アレイスターには七万六三三種類の解決、隠蔽の手段はあるが、

「問題は、この事件に本来立ち入ってはならない魔術師きみたちが関わった事だ」

魔術側なら話は別だ。

下手に科学側が魔術側の人間を倒してしまえば、魔術側は黙っては
いない。

下手すれば、戦争が起きる。

「なるほど、だから例外たる私を呼んだ訳ですか」

科学側の人間が、魔術側の人間を叩けば問題になるが、同じ魔術側の人間が潰せば何の問題もない。

「そして私は、魔術師きみたちにとって天敵になる『一つ』を保有している」

――ピクッ

ステイルは思わず、眉を潜めた。

『幻想殺し（イマジンプレイカー）』

魔術に限らず、超能力や神域の奇跡すら、右手で触れただけで打ち消してしまう。

常識どころか、異常すら霞む。

そんな力を持つ少年の表記。

……だがアレはその程度か？

ステイルには別の意味で信じられかった。

アレは異能を打ち消す程度で済むか？

そして彼は、魔神であるインデックスに対してこう呟いた。

『……………限定解除』

つまり、自分と戦っていた時、手加減の上、そんな枷まで付けていたのに、一度殺された。

そんな彼が、彼女の味方でいてくれた。

苛立ちながら、安堵を浮かべる。

……………苛立ちながら。

一瞬余計な事に思考を割けてしまったが、即座に切り替えるステイル。

今、あの少年の話を出したということは、

「…あの少年と組めと？しかし、超能力者を使うのは不味いのでは？」

「問題ない。アレはレベル0。無能力者だ。」

だが、

価値ある情報は何も持ってはいない。アレはそちらの技術を理解し、再現する脳もない……、とは続かなかった。

そんな台詞、口が裂けても言える筈がない。

何処であの少年が聞き耳を立てているか、分かったものではないからだ。

事実先程、別にプランとかは関係ないが、面倒な事態になったからだ。

「…………判りました」

渋々了承、といった感じで踵を返す。

「一つ…………いいでしょうか？」

「何だね？」

再び顔をアレイスターに戻し、問う。

「――――あの大量のカラスは、何なんですか？」

部屋の隅にある、大量のカラスの死体を指差して。

男にも女にも、子供にも大人にも、囚人にも聖人にも見えた人間の顔が凍る。

「……………」

「……………」

口が裂けても言える筈がない。

『暑いんじゃないあああああ……！！！！！！』

とか口走りながら、テレポート無しで、この要塞に大量のカラスと大量の蠅をブチ込まれたなど。

「……………」

「……………」

口が裂けても言える筈がない。

害虫駆除で、態々容器から出てしまいました。などと。

言える……………筈がないw

姫神秋沙（前書き）

だいぶ遅い更新になってしまい、すいませんでした。

姫神秋沙

side 響夜

何なんだこの空気は。

エレベーターに乗ってる時、突然オナラの音がしたときのような…。

ここはファーストフードの二階の禁煙席。

そして目の前の突っ伏して食い倒れ発言をした、おそらく姫神秋沙。

当麻君。君は何も知らない状態でこの場にいたのかい？

俺は想像するだけでゾッとするよ。

「そしてさっきから何だ青ピ、インデックス」

さっきからこっちを見ているインデックスと青ピに問い掛ける。

「……………ほらカミヤん。話し掛けらるたからには答えてやらなッ
！」

「……………そうだよきょうや。見た目で引いてはいけません。神の教えに従いあらゆる人に救いの手を差し伸べるのですなんだよ。アーメン」

「すみませんインデックスさん。別に俺は神の教えに従った覚え無
いんですが」

見た目で引くなって、自分で言っちゃったじゃねエか聖職者。

駄菓子菓子、だアがしかし。

ここで喋りい掛けたらおしまいだ。

エイワスの前で、「ねえ、ウンコでるの?」って聞くぐらいおしま
いだ。

なアらば、敢えて沈黙を守った方がイイだろ!!

「一個五八円のハンバーガー。お徳用無料券がたくさんあったから」

声掛けずに喋り出しちゃったよこの娘！

ていうか……一個五八円！？マジで！！？安過ぎんだろ！！！！

「取り敢えず30個ほど頼んでみたり」

「ものには限度って言葉、知ってるか馬鹿？」

またもや反射的に答えたら、とどめと言わんばかりにピクリとも動かなかった。

失言だったかな？たかが1710円程度に。

「それに食い倒れじゃねエだろ。食い過ぎだろ間違いなく。そしてシスターと青ピ、後で顔貸^{ソラ}せ。鬱陶しい目線向けるな」

ただの自業自得じゃねエか、同情の余地無いわ。

「やけぐい」

「……………はい？」

陸に打ち上げられた魚の様に動かなかった巫女っ子……………美琴とかぶるな。

巫女娘が、不意に呟いた。

「帰り電車賃。 四百円」

「帰り電車賃四百円必要なら、何でやけ食いなんかしたんだ？」

「全財産、 三百円」

「……………、その心は？」

「買いすぎ。 無計画」

「……………（イライラ）」

「だからやけぐい」

「歩いて帰れエ」

「お金貸して」

ブチッ！！！

右手を握り、振りかぶりー。

ガシッ、

「止めるんやカミヤん！！落ち着つこつや！！！！」

「駄目だよきょうや！殺人犯になっちゃうよ！！」

「離せピーナッツ！！この初対面の人にタカる！そのフザけた幻想は、今ブチ殺さなきゃなんねえんだよ！！」

数分後、なんとか持ち直した俺による、計画性とはなんたるかを姫神に教え込んでいると（人の事超言えない）、不機嫌そうにシェイクのストロー”だった”ものを咬み干切っていた。

何を苛ついて敵意剥き出しの目をギラつかせてる？

「ふん。その緋袴を見る限りあなたはト部うべみただけど、ト部の巫女は顔も売るの？」

「私。巫女さんではない」

うん、知ってる。

知ってなくとも、普通巫女さんは袴はいてファーストフードに来ねエよ。

「私。魔法使い」

「

.....

.....

姫神はスタンド能力を使った。

時が止まった。

うっおーい。皆フリーズしてるッぞー。↑キャラ崩壊

第三次世界大戦で、ガブリエル大天使が投入された時より凍ってらア。

見たことないが。

あ、インデックスが小刻みに震えてる。

さあ、インデックスの爆破^{プチギレ}まで残り――

三、

二、

い「魔法使いつて何！！カバラ！？エノク！？ヘルメス学とかメルクリウスのヴィジョンとか近代せ」「まあまあ、待てやインデックス」
「……………きょうや！」

「インデックス。人を見かけと性格と人間性で判断してしまつてはいけねえよ」

「カミヤん、ソイツはもう駄目や。終わりや」

「そんな終わりのな奴でも、魔法『青』ぐらい出来るかもしれんよ？」

だって、眼鏡パクる為に一回姉ブツ殺す奴も魔法使いなんだぜ？

頭吹っ飛んだ奴でも魔法ぐらい使えるって。」

「魔法『青』？か、カミヤん。何だが恐ろしい話みたいやから遠慮

しときますよ」

すると青ピとインデックスが冷や汗ダッラダラだ。

おや？声に出してたか？

これは失敗。

「——つか、勝手に聞き耳立ててんじゃないよ。おっさん共」

「ムヒヨッ！！？」

ムヒヨ！？どんな驚き方だオイ。

青ピが驚いたのは、いつの間にか十人程の黒服の男が囲んでいたからだ。

そして姫神には何の変化がない。

「あと百円」

姫神は、無音で立ちながら言った。

『彼等』に一切警戒せず。

『彼等』の一人が姫神に道を譲る様に下がり、内一人が百円玉を掌に載せて姫神に渡す。

「オイ」

「何？」

「オマエ、名前は？」

俺は『彼等』を敢えて無視し、質問する。

「――姫神秋沙」

「俺は上条響夜だ。またな」

姫神は少し目を見開き、答える。

「……………またね」

二つ目の物語はプロローグを終え、事件は幕を上げる。

再会……って程じゃないか（前書き）

神裂と遊ぶ番外編、いついれるかな……？

再会……って程じゃないか

side 響夜

「ハア………さて、どう動くか……」

今は姫神と別れた帰り道。

青ピ？シスコン？いつの間にか消えてたよ。

どうやらアイツ等は瞬歩を修得して逃げた様だ。

274

あの時、百円で三沢塾から逃げられる姫神に百円渡したとして、学園都市からは早々出られない。遅かれ早かれロリコン二号に捕まる。

逃げられたとして、アイツ自身の問題は何も解決しない。

『姫神は、イギリス清教が保護した。』

この状況を作り上げなければ、ディーフブラッド吸血殺しは封じられない。まあでも、

「我が儘なんだよなあ……」

俺は必死の思いで逃げて来た姫神の思いを踏みにじった。この事実
は変わらねエ。

結論として、姫神については俺単体で動くのはダメだ。それに、あ
のロリコン二号はまだ救いようがあるからな。（勝手にロリコンと
決めるな

ローマ正教の自己中代表格、腐れ神父ヒアージュは兎も角、手段はアレだがア
イツは誰かの為に何かをしようとした。

そこは評価出来る。

「ロリコン二号？それって何？きょうや」

「お前は特に知らんでいい」

オマエ
インデックスだけには絶対に言えんだろつ。

ステイルが完全武装で火炎放射器持って突っ込んで来るわ。

「どうすっかなあ……きょうやきょうや!」……………ハイハイ、何
でしょうかインデックスさ——あア、忘れてたよ」

『限定解除』。

『うおい!—ウンコ神(仮)!』

『今度はスクアーロさん!?どれだけ口が悪い人の口調起用してる
んですか!—(泣)ていうかウンコ神!?!』

(仮)にはツッコまない……………か。

『オマエ、完全記憶能力消したろ。』

『ギクッ!…な、何のこ『0.3秒で分かる嘘ついてンじゃねエ
よ……………て……………テヘッ』

『何してくれてんだ!—結構な利点だったんだぞアレエ!—!』

『あ、あの…事情が有るんですよ！コーヒーが……』

『コーヒーがアあ！？またミスか！！またミスなんだろうがッ！！』

つか、コーヒーから何で完全記憶能力が消えるッてどういう事だ！？

『すっすいません！！今度埋め合わせに何か…』ブツッ

切りやがった…。毎度毎度どういう理屈だ？この高次元干渉。

「きょうや！！見て見て！」

そんな事をしていても世界は進む。念話の様なものだからインデックスには気づかれない。

そして、そこにいたのは捨て猫。ウンコ神のせいで忘れてた、後のスフィックス。

そして『どうでしょう（、（、（？』的な顔止めるインデックス。

「……ねえ、きょうちや」

「飼いたい……………」と？」

「ベツ、別にきょうちやが飼いたって言うんなら、私は何も言うつもりは無いんだよ」

「あそ。さて、今日の晩飯は何に——」

ガシッ。

「……………なアに俺の体を全身の体構造を最大限活用した引き留め方してんだインデックス。オマエはとやかく言うつもりは無いんだよなア？」

「飼いたいんだよ……！」

本音出るの、速いでしょくに。

「駄目」

「何でなのかな!？」

「目標が逃げたした」

「ええッ!!？」

あんだけ大声出したら、普通逃げるだろ。

「きょうやのせい!!」

「ほオ、理由を言ってみろ。十万三千冊の魔道書を持つオマエだ。さぞかし俺が反論出来ねえ理由を言ってくれんだよなア」

「早く追わないと!」

シカト
無視か!!

「――!」

「ん！」

そつ、このタイミングで気付いたんだよな。

「……………何だろう、きょうや、近くで魔力の流れが束ねられてるみたい……………」

インデックスは気付いた様だな。気付かないとヤベエが。

「……………属性は土、色彩は緑。これは……………ルーン？」

そつ呟くと、何時ものインデックスではない、魔術に携わる者の眼つきをし、路地裏に走り出す。

「インデックス！」

「誰かが『魔法陣』を仕掛けてるっぽい。調べて来るから、きょうやは先に帰ってて！」

「……………罨かもしれんだろうに……………」————ンで、態
タイムデックスを引き剥がして人払いたあ、また面倒事かよ？」

そう。既にここら一体は人気が無い。

「――全く、君の感覚がどうなっているか知りたいものだな。炎剣で縦にブツた斬っていいかい？」

背後からの声。勿論聞き覚えがある。

「残念ながら、斬れはしないだろうが流石に熱い。勘弁だ」

くわえタバコに、目元のバーコード。赤毛のロン毛の長身神父。

「――久しぶりだな、スタイル？」

ルーン魔術師、ステイルマグヌス。

再会………って程じゃないか（後書き）

すいません傍観者さん。このまま行くと、やっぱりフルボッコになりそうです、緑髪。

完全記憶能力消去の理由？話が書きにくいからだッ！！（うおい

感想、待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9041v/>

とある魔術の死神戦記

2011年10月9日19時15分発行